

607
143



* 0 0 0 2 2 5 6 0 0 0 *

0002256-000

607-143

日本没落か？

布利秋・著

万里閣書房

昭和5

AAC

7.7.28



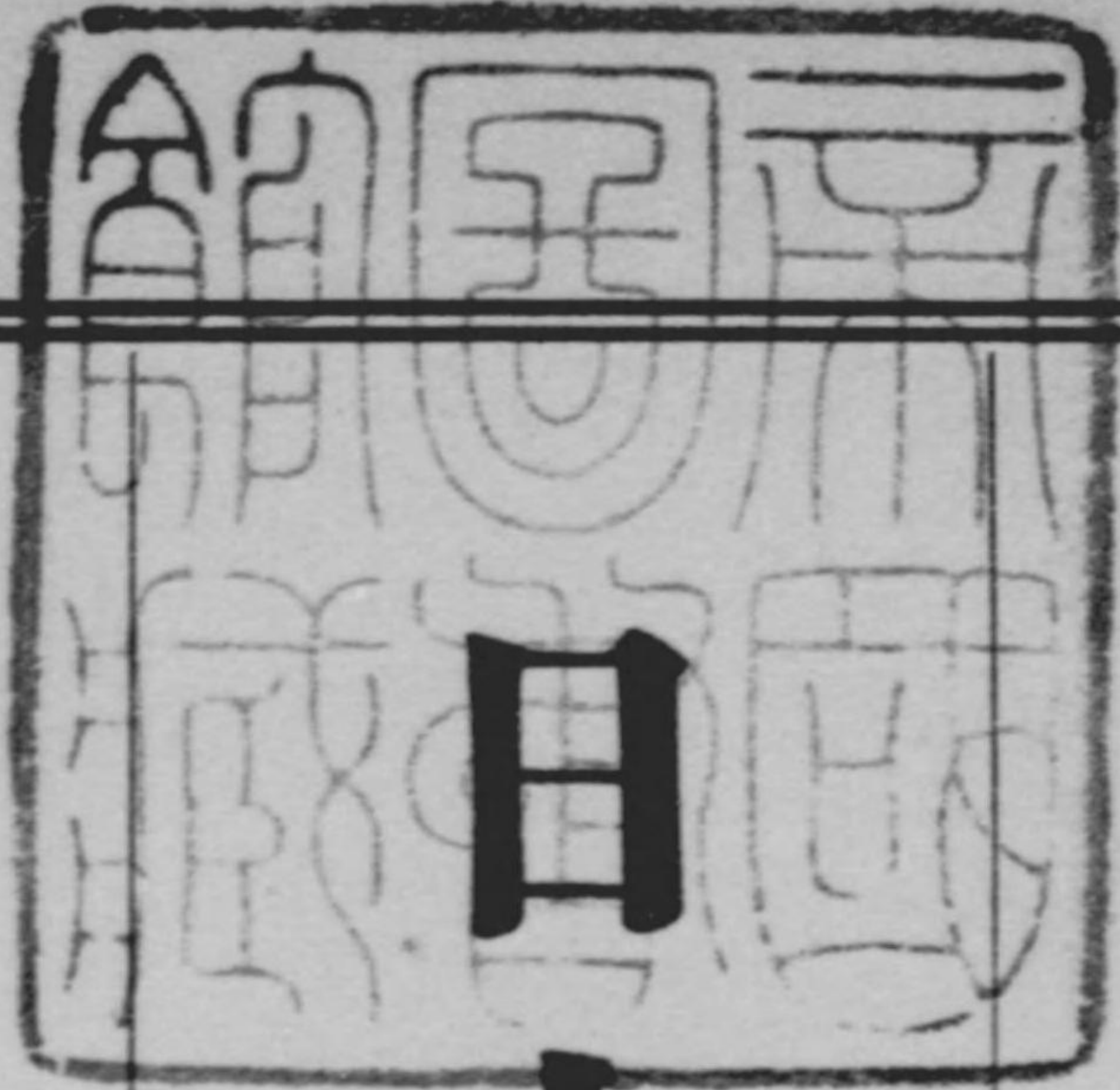
布利赫著

日本没落か？

世界五十五ヶ國を遍歴したる著者が
 十八年目に見たる祖國日本の眞姿は
 ？ ？ ？
 没落過程を急轉直下する現代
 日本に呼びかけた巨人の

590





日本没落か？

布利秋著

東京 萬里閣書房版





著者の近影

607-143

日本没落か？

(目次)

目次	次
ザックバランに告白する……………	三
トリックで踊る……………	五
残飯の地下室……………	六
恐ろしい日本……………	八
ミス・日本の戦術……………	二一
天に唾する……………	二三
イギリス人は笑ふ！……………	二六
夜店の人頭税……………	二〇
天皇の慈悲は萬民のもの……………	二三
結婚ライスカレー……………	二四
貴族のビフテキ主義……………	二六
市民の樂屋裏……………	三〇
マネキンの素顔……………	三二
都會の貞操帶……………	三三
死體の留置場！……………	三三
サラリーマンのタバコ踊り……………	三五
ペンキ屋の裏切り……………	三七
彼は西！ 我は東！……………	三九
ビストル記念塔……………	四二
モツブの焼打ち……………	四四

金持のドロ的戦術……………五
 昭和の青年は僕の……………五
 この首が危い！……………五
 小心翼々！……………五
 金権階級の横暴……………五
 アメリカ人は萬歳を叫ぶ……………五
 震へる全権の一夜……………五
 叛亂！ 叛亂！……………五
 暗黒！ また暗黒！……………五
 どん底の救済……………五
 白粉をのけた裸體……………五
 學生はなぜ印半纏を嫌ふか？……………五
 なぜ！ 學校に行つたか？……………五

やがて醫者の氾濫……………七
 戀愛のニキビ青年……………七
 娘のレットル……………七
 大郡は沙漠の牧場……………七
 結婚牢獄に悶ゆる……………七
 スピードの貞操……………七
 銀座の不良化氾濫……………七
 更生のない青年……………七
 青春期をどうした？……………七
 危い尖端に立つもの……………七
 尖端を歩む者の末路は？……………七
 手段は選ばぬ出世！……………七
 エロの捕虜となる……………七

新勢力は勝つ……………七
 人間魔の三等客車……………七
 金持こそ危い！……………七
 色盲の現代人……………七
 馬鹿ッ泥水をかけるな……………七
 コラー！ そこは道路だぞ！……………七
 スピードの奴隷……………七
 外人の冷笑を見て……………七
 金の無い日のどん底記……………七
 何が彼等を？……………七
 どん底に潜むヒドイ戦術……………七
 強盗征伐の新しい反動……………七
 皇室人を除けて了つたら……………七

日本はローマとなるか？……………七
 黄金への降伏者……………七
 没落の日本に踊る、モガ、モボ……………七
 秀才は木乃伊に……………七
 しつぺい返し反動……………七
 日本没落の掲示板を見よ……………七
 彼等の化けの皮！……………七
 彼人根性の役割……………七
 誠意も浪花節化す……………七
 スピード・エロ・エロ……………七
 天皇と無産者……………七
 曲線美のモダン戦……………七
 女の安つほい宿命……………七

日本商人の世界的没落……………一四四
 無職者の一萬圓自動車……………一四六
 不審なボーナスの墮落……………一四七
 日本の新しい誕生？……………一四九
 公認スパイ戦とお札博士……………一五〇
 運賦天賦の世相……………一五二
 別嬪のお尻の下……………一五三
 魔の借家に住む私……………一五五
 辻に迷ふ花嫁……………一六二
 青年の横顔……………一六四
 賣名婦人の天分……………一六五
 モガの秘密ホテル……………一六六
 サラリーマンの横つ腹……………一六九

エゴイズムの市場……………一七二
 世界に漂ふキモノ……………一七二
 日本商人根性……………一七三
 おメカケの行洋……………一七五
 時間喰ひの八百屋町……………一七七
 西洋人が日本に來ての恐怖……………一七九
 文明は發狂する……………一七九
 聖地に人肉のほひ……………一八二
 過去の戦線を見よ……………一八三
 無宿の北海にさまよふ……………一八四
 プロに恵まれぬ風光……………一八六
 富士の裸體を見て……………一八七
 どうせは頓死か糖尿か……………一八八

婦人病王國の日本……………一八九
 銀座裏の五色の場面に……………一九一
 金髪美人の銀ブラ……………一九三
 日本紳士の種々相……………一九四
 日本を亡ぼすものは誰だ？……………一九五
 巡査に小便をひつかける……………一九六
 酔ひどれの歓迎……………一九九
 チャンバラ主義の幻影……………二〇〇
 ジャズの天井裏……………二〇一
 窮鼠猫を嚙む危険は來る……………二〇二
 田舎スピードの主人……………二〇三
 日本はイギリスと戦へ……………二〇四
 日本かユダヤか……………二〇六

外交官と軍人との陷穽戦……………二〇七
 ビストルと軍刀の自殺戦術……………二〇八
 呪はれた外交の尻馬……………二一〇
 弱い婦人のスローガン……………二一三
 夜店乞食の穴小屋……………二一五
 日本娘への希望……………二一七
 日本娘のトタン張り……………二一八
 娘の皮を剥いたら……………二一九
 小便垂れの洋行紳士……………二二二
 ならず者の表と裏……………二二三
 検事と社會主義者の角力……………二二五
 令嬢と女中の秘密……………二二八
 虚禮の第一歩！……………二三〇

情實に踊るモダンボーイ……………二二二

特進者の裏を見よ！……………二二三

工場の残飯を食ふ……………二二三

女買ひの戦術……………二二五

労働者の不仕態……………二二七

日本學生の旗印……………二二八

どうせ素ッ裸の身だ……………二四〇

水てん藝者の氣焰……………二四一

時代おくれの娘と親……………二四三

一家のユートピアとは……………二四四

すし屋の前に立つたアメリカ人……………二四六

箱入娘のモダンガールへ進出……………二四七

時代病の威嚇！ 一喝！……………二四八

スピードへの人間反逆……………二五〇

處女の肉體は何處へ！……………二五三

女は男を喰つて行く……………二五四

ドウ考へるか日本人よ！……………二五六

すべての希望を棄てよ……………二五七

なぜ！ 西洋を排撃しないのか？……………二五八

娘を酒代に賣る……………二五九

モデル、マネキンを尊重せよ……………二六〇

外人が不快がる日本印象……………二六一

あれでも女か？？……………二六四

醜い都市美運動……………二六九

青年に家なき日本……………二七一

神様は放浪する……………二七三

神さまを喰ふ……………二七五

脅嚇渡世の狼群……………二七六

恥かしい都會禮讃……………二七七

日本人の風呂場を見よ……………二七八

東京の大掃除を見ろ……………二七九

サラリーマン根性を見よ……………二八〇

時間スピードの幻滅……………二八一

江戸の仇は長崎だぞ……………二八三

一ッばい一錢の飯を食ふ……………二八九

毛唐のドテツ腹は？……………二九〇

來るべき日本の運命……………二九二

女優の臀肉スキート……………二九三

米人と赤坂の暗路へ……………二九五

口先の賣り喰ひ……………二九八

覆面の差し出した名刺……………三〇〇

不良のスピード時代……………三〇一

不心得な汽車中の女……………三〇三

外人のビストルを受ける……………三〇四

民謡氾濫は亡國の兆……………三〇七

英雄は何處から出る？……………三〇八

ドロ的任侠が任侠を賣る……………三〇九

あなたは強盗ですか？……………三二〇

今日は斷然許さぬぞ！……………三二二

何故老いほれるか？……………三二四

高級社員を首誅れ！……………三二五

スポイルした日本人……………三二六

教員と巡査を監視せよ……………三三八

大阪人の大名譽！……………三三九

無智な淺草を見て……………三三〇

日本人の世界的名譽……………三三一

鬼の念佛思想善導……………三三二

驚いた料理屋の臺所……………三三三

電車内の金髪と日本美人……………三三四

外國語かぶれの日本人……………三三五

新しい人間の看板……………三三六

貴婦人を装ふ魔女……………三三七

デカダン淑女は？……………三三八

泣くに泣かれぬ……………三三九

タマニハヤツつけろ……………三三〇

夢を追はぬ青年學生……………三三一

マグロは女給の背後に……………三三四

日本に歸つた初夜！……………三三七

さまよへる小國民よ……………三三九

明治の古いほれ紳士……………三四〇

ぶら／＼者の正體……………三四二

〇〇の日は近づく……………三四四

日本人は大陸に育たず……………三四五

日本性の變態表情……………三四七

泥的——親分推戴の理由……………三四八

その祕密を逃がすな！……………三五〇

無氣力な大衆戰術……………三五二

ゴマ化しの祕戰……………三五五

怪奇的なドロ棒……………三五六

斷末場の祕劇……………三五七

お茶漬で國を賣る……………三五八

何處まで行くのか？……………三五九

日本性の墮落を喰ひ止めるものは……………三六一

そろばん勘定のユダの日本……………三六三

俺は尻馬には乗らないぞ……………三六四

電車内のザマを見ろ……………三六六

通信省は眠る……………三六七

日本の學生はどうだ？……………三六八

ヒヒーと飛び込む裸婦……………三六九

日本生活から辭職……………三七一

性慾の捨て場は何處だ！……………三七三

若い貞操を献けて……………三七六

僕が皇室に生れてゐたら……………三七八

一錢のために泣く……………三七九

エブロン市場の魅惑……………三八一

情友アーミの時代近し……………三八三

國辱の玄關！……………三八四

女！ 女！ 女！……………三八五

日本女の尻ツほ……………三八六

禍ひの家庭に娘の市場……………三八七

なさけない昭和の游泳術……………三八八

角袖三面巡査……………三九〇

世界に無いゴロツキ市場……………三九一

とり入れたハリウッド……………三九三

日本人のユダヤ根性……………三九四

素ッ裸の政治屋の肉……………三九六

腐つたものの價……………三九九

誠首したあとの寢醒め……………四〇〇

脊に腹は替へられぬ……………四〇二

浪人の未亡人を喰ふ……………四〇三

可愛い人肉の本笑……………四〇五

雑煮の中に人生の映畫……………四〇七

食ひつめた銀ブラ移民……………四〇九

何故！出世したのか？……………四一一

妻はキサマではありません……………四二二

貴顯は囚人である……………四二四

ゲー・ビー・ウー……………四二六

空巢を狙ふ紳士……………四二八

女よ！姿を誰に見せるか？……………四三〇

エ、エ、なんですって……………四三二

人間一疋！安い相場だ！……………四三四

何故！友を賣るか？……………四三六

學生はゲー・ストツプ……………四三七

「オイ！落しものがあるぞ」……………四三〇

スポーツを見る眼は何だ！……………四三三

日本滅亡の號外！……………四三五

海から祖國を見て踊る……………四三七

女を見つゝ郷土へいそぐ……………四三九

靴底から見た私の立場……………四四三

(目次終)

日本没落か？

布利秋



ザック・バランに告白する

どうせ出版するなら、うんと賣れる方がよい。中身は悪くともレツテルで胡麻化さうと序文を大家に頼むのが普通の手口だと聽いてゐる。私はブック・メーカーの氣持を實際に味つてゐない。と云ふのは長い間、外國で暮したからだ。

したがつて馴染と云ふものもすくないし、序文を頼む人もなければ、また頼むだけの人物も知らない。至つてウムジ曲りのやうだが自分のことは自分でやる外はない。

「日本没落か？」と、飾り氣のない、ザック・バランな言葉を使つて、無遠慮に——日本の病根をさらけ出して見たい。病を知らないでは、治療ができない。しかし、ほんとうに病根を知つてゐる人がどれだけあるだらうか？ よし知つてゐたにしても、半身不隨病で、どうにもできない人が多い。

私の立場は、日本の病を知るには、もつとも都合がよい。十八年間——日本の國を留守にして

るた。その間に世界の五十ヶ国を遍歴し、二十七萬餘哩ほど歩いた。

その間に、日本はいろいろに變化した。いつも日本に居る人達は、毎日自分の子供を見てゐると、子供がどれだけふとつたか？ どんなに變化したかは、はつきりと意識ができない。しかし五六年も見ないでゐると、その子供の變化に、びつくりさせられるやうに、十八年も見ないでゐた日本は、どんなに變つてゐるか？ その變り方については、私の眼がもつとも正直に告白することができよう。

殊に日本よりも、ずつと幸福な文化に育まれた自由の國に住んで、十八年間——日本を見なかつた眼で、突然、日本を見る時に、私の眼には、極めてはつきりと、日本は没落へいそいでゐるのではないかと、かう直感させることが多いのである。

眞に自分を知るには、眞剣に日本の眞價を知るには、どうしても自分の病、日本の病を探ることである。それによつて没落も誕生となるのである。

私が率直に、ザツクバラんに、日本を攻撃することは、諸君をして自惚れさせないやう、わざと毒言を綴つたわけである。そして、これが十八年目に日本を觀た第一印象の日記である。だから

ら、ひとり言もあらう。自慢もあらう。愚痴もあらう。恥を知らぬこともあらう。うぬ惚れもあらう。憤怒もあらう。——しかし日本を見た時の日記である。先づカンフル注射の利く時にこの書を読め！

トリツクで踊る

日本人は、月並の坊ちゃんで育つてゐない。心で泣いて笑顔で送ると云ふ艶つほい藝者のやうな祕密がからんでゐる。實意を旗幟としてゐても、心の底にはメスを握つてゐる。喜怒哀樂を色に殺し、食ふためとあらば、どんなことでもやらうとする。

「どうせ今の日本は、悪いことをやらないでは頭が上らぬ。萬一仕損じたらその時は運のつきだ。密輸入をやれ、阿片を賣れ、人を欺せ、弱い者を泣かしてやれ、法律の網目を遁がれさへすれば、どんなことでもいい、金さへ儲ければ、それが勝利だ。……政治家を見よ、貴族を見よ、金持を見よ、悉く半面は暗黒ではないか？ それを切抜けた者こそ即ち成功

者だ。どうせ眞面目では成功はできない。」

かう云ふ氣持が、現實のどん底を走つてゐる間は、日本は甦ることはできない。暗黒な成功者を賞揚して、それ等の成り上り者にあやかりたいと願ふ——多くの日本人には、眞剣な正義は望めない。公正な生活は求められない。

「生活そのものが眞に地獄だ。皮肉なトリックによらねば金儲けができない。正義をモットーとしては儲からない」と云ふのが現代的戦ひである。

世界を巡つて見て、日本ほど物凄いとこころはあるまい。金儲けの戦ひがあまりにも、惨忍である。——人を泣けてこそ儲けがあるんだ——とは、何と物凄いとこころであらうか？

残飯の地下室

僅か二錢で、デパートの残飯を買ひ、それで一家四人がやつと命をつないでゐるもの、十一人の家族が僅かに四疊半の部屋で、重なり合つたまま夜を明かすと云ふみじめさ、路傍に捨てたも

のを拾つて、それで衣食しようとするもの、便所の中を探がして、落し物でも拾はうとあくせくするもの……

惨酷な失業者は路傍にあふれる。職を與へよ——との泣き聲は、實に眞剣な涙である。教育のあるために就職ができない。病のために失業すると、再び復職ができない。

「弱き者は餓死せよ」金持は豪奢に遠慮なく贅澤をする。口には日本人同胞愛であつても心には鋭いメスを握んでゐるのが、即ち日本の金持である。

不景氣のどん底に悩む者を尻目にかけて舶來品を買ひ、緊縮とは、何處吹く風かと云つた調子で、弱い者の社會を侮辱する日本の有産階級者は、眞に我利的エゴイズムの典型である。

不景氣は極度に深刻になる。緊縮政策の影響で、ダイヤ寶石類が下落すると、それを狙つて買ひ占めをやるのが日本の貴族金持だ。

一枚のハンカチも、四圓だ五圓だと、高い品を使つて自慢する。なんでもかでも高くさへあれば、それが虚榮を満すわけである。

「宅の自動車は三萬圓しましたのよ。」

一方に残飯を食ふ貧民があるかと思へば、一方にはかうした成金がゐるのだ。青年はそれ等ブル主義に憧れ、自分達も樂々と金儲けをしたいと念願する。しかしどうせ金持にはなれない。ではいつそのこと養子に行かう。財産家への養子なら、失業もない。就職苦もない。養子は、時世がすすめて呉れる就職口である。——時代は青年のために養子職を與へた。

恐ろしい日本

時代は恐ろしい。

ほんとうにこの恐ろしさを自覺してゐる人が幾人あるだらう——か。

うっかりできない日本である。

日本——その日本、それはいつも——何ものかに脅かされてゐる。

我等の日常生活は國難である。富の分配を誤つた日本は、眼覺めた者のためにその不合理を叫ばれてゐる。

經濟、外交、軍備——は一君萬民の動きである。一君萬民が日本の國體である。しかるにこの國體を利用して惡徳なエゴイズムを振りまはす者が、繁昌して、正しい者が弱者となるといふ我が日本は、眞に恐ろしい立場にある。

經濟、外交、軍備によつて生きてゐる我が日本の生活は、——すべてに一君萬民であるはずなのに、生活それ自体は一君萬民でない。我等の生活とは？ 外交と軍備によつて、國境外からの侮りを防いで、經濟の力で生存能力を發揮させ、その經濟は國境線を越える時も、越えない時も、我等の生活を支持してゐるものである。

我等のこの經濟——即この生活は、軍備、外交によつて護られ、そして安泰な形の上の生活をつづけてゐる。——かう因縁づけられた我等の生活は、一君萬民の國體に育まれて來たのだ。しかしこの國體は、強者のみの國體であつて弱者のためには、何ものも報いられてゐないといふ國體である——と云ふ合理的な信念が、大衆の識者を動かすのである。

弱い者——即敗れた者が一國の賊であつて、強い者——即勝つた者が、陛下の錦旗を護る官軍であるとかう叫んだことは、日本における生活の慣習である。これは國境線外の文化に觸れ

ない時代の慣例である。しかし今日は海を越えて外國の文化に觸れてゐる時である。しかるにこの封建的色彩の強弱二ツのものが、依然として我日本の癌となつて惱んでゐることは、國民生活の上には全く不幸である。

いつまでも封建を捨てず、強者のための——一君萬民であるならば、左翼運動は正當防禦であると云はなければならぬ。

經濟、軍備、外交によつて國民生活を營む我等日本人が、一君萬民であることは明かであるのに、經濟——その富は、一君萬民ではない。一君と一部の資産家の富のみである。——一君萬民の實體は——即ち平等の生活でありたい。一君——その下の萬民は平等であるべきものである。その萬民に平等がない。生活に平等がない。

なんと云ふ矛盾であらう——か？ こゝに惱ましい日本、恐ろしい日本、脅えた日本、病める日本が——生れたのである。たゞ安閑として、どうにかなるだらうと、不合理な慣習に生きてゐるものが、特權階級者である。

元來——一君萬民——その萬民の中に、特權階級のあるべきはずのものでない。萬民は無差

別平等であるべきものである。

ミス・日本の戦術

時代の娘！

ミス日本は！ 意地にも、古い日本に向つて反抗しなければならぬ。

呪はれた囚はれた過去のミス日本は、どこまでも古い日本に反抗するのが至當だ。

なぜなれば、踏んで、蹴られて、突き飛ばされて來たのではないか。

時代の魂は——恐ろしい。

時代の娘は、いつの間にか、はつきりと自分の意見を持つやうになつた。個性！ その個性の輝きが築かれた。しかし、幾分エゴイズムに傾いてはゐるが、これも時代への反抗として止むを得ないことであらう。

ミス・日本！ その行動と意志とは、自分自身で考慮してゐる。自分の常識本位で動かうとし

てゐる。

昭和嬢！ ミス昭和は、昭和らしく動かうとしてゐる。——ミス昭和の貞操——は、關東大震災のやうに著しい變化を見せて來た。新時代の空氣に觸れると、舊時代が如何にむごたらしいミス日本を齎したかを。

日本娘の過去は、ほんとうに惱ましい受難であつた。柔かいミス日本も、舊時代を呪つて、感情的にも反抗したくなるだらう。そこで眼醒めたる日本嬢は眞剣に考へさせられる處女性に對して、二ツの分岐點は生れた。

一つは、時代から——解放された自分達はどこまでも自分である。自分——個性をはつきりとそして正しく守ることである。そして呪はれた舊時代の他力的貞操でなく、新時代に恵まれた自力的個性の貞操を尊んで、ほんとうに處女性を守りたい。どんなことにも迷はずに、——結婚の日來る——その日まで、異性の迫害を退けたい。——はつきりと自覺的に貞操を固守したいと願ふ娘が、だんくふえて來た。

が、それとは反對に、處女性などは、さう——たいしたものではない。新時代には、軽い貞操

に生きればよい。まして囚はれた過去に對しては、反逆的に出直して見たい。そして一面から見ても、すでに解放された昭和嬢である。歴史からも解放された。強い者からも解放された。そこで自分自身でも解放しよう。——それは眞先に貞操から解放しよう——と云つた風な極端な女もあれば、そんな觀念からでなく、無自覺に、ふらくとした氣分で處女性を安値に賣る娘もある。勿論、貧乏のあまり已むにやまれず犠牲になる娘も澤山にあるが。

淪落か？ 貞操か？ 緊張か？ 放逸か？ つまりは、中途半端な觀念を持つ娘がだんくんに減つて來た。どこまでも、はつきりと極端に分れて了つた。

眼に映る——時代相は浮氣の氣持だ。その空氣は自覺的に浮氣へ走るか？ 無自覺の誘惑で、自からジャズの方へつれこまれて行くかの二ツに一ツだ。

天に唾する

日本の大衆を見よ。

そしてドイツの大家を思へ。

ドイツ民族は、ラテン民族よりもずつとずつと後から文化をうけ入れた。だからラテン民族から見れば、昔の野蠻時代を聯想していつの間にかドイツ人を侮つてゐる。いつまでも昔のことを云つて侮辱する方も賢いことではない。

日本の大家は、日本特權階級よりは、ずつとおくれて文化をうけ入れたのであつた。その特權階級がいつまでも大家を侮ることは、特權者の中に賢いものがあるからである。

ドイツ人は、一切の輸入品を排撃して富の増進を望んだ。しかしコーヒーや紅茶は、どうしても輸入しなくては飲めない。ドイツ人の生活は賠償金の負擔を脊負つてゐるからよほどに苦しい。

例のヤング賠償案でホツと一息ついたものの、稼いでは支拂ふと云ふ數十年間の賠償負擔人なればこそ支拂ひもできるのである。そしてドイツ人なればこそ世界大戰を巻き起したのだ。いつも全ヨーロッパを支配したい。世界の牛耳を握りたい——と、切に願つてゐるドイツ人は、自から手を出して、自から喧嘩を賣つて、自から他國の干渉をうける身となつた。

ドイツ人が天に唾した唾は、自分の顔にふりかゝつたのである。もしも地位を轉倒してドイツが勝つたとしたら、どんなに野蠻に無茶をやるか——それを思ふと、身の毛がよだつと云ふのがフランス人の心配であつた。

日本の大家は——日本の特權階級に向つて手出したのではない。喧嘩を賣つたのではない。日本の特權階級が、あまりにも侮辱し、あまりに我儘をやり、あまりにも横暴であるから、大家は合理的に對抗しなければならぬと、弱いながらも大家を率ゐるムーブメントが起つてゐるのである。

ドイツ人の生活は苦しい上にもますます苦しくさせられてゐる。それは自から求めた賠償の影響であるから、みすく、英、米、佛、伊、白に搾取されるにしても仕方のないことで因果應報である。しかし、日本の大家が、一部特權ブルジョア階級のために、無暗と搾取されることは、ドイツが聯合軍のために搾取される意味とは當然相異してゐるものである。日本の大家が特權ブルジョアのために搾取されることは因果應報ではない。それなのに大家はいつも搾取されてゐる。それは大家そのものが、あまりにも意氣地なく、無氣力であるからである。

イギリス人は笑ふ！

イギリスの一新聞記者スミス君は、ロンドン市のデーリー・テレグラフ紙に一文を寄せて日本を冷罵してゐることばに。

東京市は足掛八年目に復興式をあけたさうだ。その迅速なことはたしかに一驚異であらう。しかしそれはアメリカニズムの降伏に相違あるまい。

——私はその大震災の時には、東京に住んでゐた。だから當時の惨状を眼の前に呼びよせることができる。それと同時に、日本民族のあらゆる缺陷もよく目につくのである。その輕佻浮薄さ、人を信じない疑心暗鬼は、自からを傷ひ、他人を毒し、大國民たり得る襟度

のなかつたことは眞になかなかはしいことであつた。

ついでに——その惱ましい日本性を徹底的に焼き拂つて、八年目の復興祝典と共に「心」の復興をやるのもよかつたらうに。

私は——その當時を思ひ出すと、日本人が白色人種から排斥されて憤慨しながら、鮮人に對する態度は——どうであつたか？ 全く痴人のやる業であつた。そして眞に残忍を極めた。あれでも文明人だらうか？ 人種平等の主張者であるのか？ 東洋の盟主であるのか？ 私は眞にもどかしく思つた。

元來——私は、日本に對して同情をもつてゐる。そして多少とも日本人を理解してゐるつもりだ。しかし大國民として全く資格のない民族であることを惜しむ。かの地震受難の時にはもつともよく露骨に證明されたことが玉にキズであると思つた。その當時の日本人の空氣は、鮮人を敵としてつけ狙つてゐた。

「鮮人をがすな！ みな殺しだ！」

と、日本刀を打ち振つた。それだけならまだいいとしても、疑心暗鬼！ 自から患ひ自から脅えるのであつた。そこに大國民的襟度が缺けてゐた。

「そら來たッ！ 鮮人が？ アイウエオを言つて見ろ、——承知しないぞ！」

まるで狂人のやうに脅えた。私などはイギリス人だから鮮人に似てゐるわけもないがそれでも

夜分になると、一步も外出ができない。眞に戦々兢兢たるありさまであつた。早く逃けろ！

今數萬の鮮人が襲つて来る。

大きい屋敷は、かたつばしから放火して廻るんだ。

「いま石油罐を提げて、×××まで襲來してゐる。はやく逃けろ。」

大火の火元は鮮人だ！

鮮人を見たら一刀兩断にやつつけろ——とただ理も非もなく脅えた。そして青年團は辻々に自警戦線を張つた。

自警の敵は——鮮人だ。

五名の鮮人は——男泣きに泣きくづれて私に助けを求めた。

一步——街上に出づれば、竹槍で衝き殺される。

どうぞ——救つて下さい。

僕は大英國民の雅量で、五名の鮮人を隠した。その翌日はまた三名の避難鮮人が押しかけた。八名——十名——十五名。

僕の部屋は鮮人の巢となつて了つた。

十日を過ぎ二十日を過ぎ——鮮人の荒らしまはつたと云ふ疑心暗鬼は、いづれにも實證が見えなかつた。

數萬の鮮人が屋敷へ闖入する。石油罐を提げて放火するなど——どこから出た宣傳か？ それ

がすでに脱線である。疑心暗鬼である。眞に輕薄な妄動であつた。

自然の大革命に際して、何の修養もない日本人は、むざ／＼鮮人を殺した。昔のサムライ根性

で辻斬りをやつたのであつた。

大國民の資格は——疑心暗鬼に動じないことである。日本人は火山の國に育まれてゐる以

上、地震受難は免れない災難である。しかるにその受難に對して何の修養もなく、たゞ竹槍と日

本刀で——通行を威嚇した。

天災革命に際して——あの始末だ。もし人爲革命の日が來るとせばどんなに惶恐だらうか？

それを想像する時は眞に身の毛がよだつやうだ。私は常に思ふ。人間は非常な場合に大事を誤まるものは大國民ではない……と。

東京復興祭を——風のたより聞くに及んで、惨殺された——無名鮮人の墓に此の一書を献けた
いと論じてゐる。——これは他山の石でなく。心すべきことではなからうか？

夜店の人頭税

夜店のバナナ屋の前に立つ。

「この一と山が二十銭だ。安いもんだ買つて行け。」

「十銭にまけろ。」

「まかりません。」

「まけなきや買はない。」

そこを見捨てて一二間歩きはじめると、

「まけた——まけた。旦那まけましたよ。」

と、すぐに新聞紙にくるんでゐる。その量は——前に見たバナナよりも少ない。そこに夜店の

バナナ戦術が動いてゐる。全部が瞞着の戦線である。

x

夜店の下駄屋の前に立つ。

「一そく五十銭の下駄。」

「三十銭にまけろ。」

「まかりません。」

黙つて行きかけると、また

「旦那まけました。」

と、呼ぶ聲。——よく見ると五十銭の下駄は——三十銭の下駄と入れ代はつてゐる。もしも田舎者であつたら、すぐに紙に包むだらう。

だが、都會に馴れた者、夜店商人の夜の戦術を知つてゐる者には、そんな馬鹿はゐないだらう。

「下駄が代つてゐるぢやあーないか？」

「いえ、代はるもんですか」……ハハハ、

ドイツでも、フランスでも、イギリスでも、アメリカでも、これが近代的流行の一ツだ。
職業婦人と職業青年と。

三十圓位の女の給料ではどうにもやつて行けない。

錦紗の衣裳——一枚だつて買ふ餘裕がない。二階借りの間代を拂つたら、残りは胃袋につめ込んで了ふ。さうすれば何一ツ残りッことはない。

朝晩の電車に乗るだけでも命懸けの仕事だ。眼に映るものは自動車の令嬢——それは望んでもできないことであるがせめては結婚によつて氣樂にして見たい。しかしそれもできない。一生一代の中に、角かくしをあてて、立派に結婚することは、到底望めないことだ。

アーミ情友！——これが一番に調法だ。

小使は——情友の青年から貰ふ。キネマへも、芝居へも、情友のフトコロを搾つて楽しむことができる。

美しい化粧術。

うまく化粧して、青年を魅惑すれば、結婚難の青年が釣り込まれる。アーミ情友にはなんの義

務を負担しない。問題は子供のできる心配だ。それもどうにかなるだらう。——一人の青年だけがアーミではない。肉體は自由だ。小使錢をくれる青年なら誰でもいい。

新時代の職業婦人はこんな風に進んで行く。そして青年の方でも——どうにか就職ができる。給料は三十五圓だ。結婚義務を背負ふことは、望んでもできない。まかりちがへば女の給料でも使つてやらうかと。

アーミ情友萬歳！——その方へと進んで行く。義務のない別居のアーミ情友——これが一番に便利だ。と、かう云ふ風に本能のスポーツが流行しはじめた。

資本家の横暴から大衆は、ますます苦しむ。その結果、資本家の守る國家はだん／＼に衰弱する。ひとり資本家のみ榮えても社會の大衆が——生活に墮落して了へば、やつぱり資本家の損害である。

それを氣づかずに、無暗に資本家振ることは自から亡ぶものである。

貴族のピフテキ主義

人間に貴賤の差があるはずはない。

しかし日本には貴賤の制度をおいてゐる。

所謂——貴人なるものの部類は、奥深い庭に立てこもつて、玄關を國境として、城壁に住まつたつもりである。

家を出るにも、入るにも、衆人に監視されて——別人扱ひにされ、一向に人間味のない生活を つけてゐる。

そこに人生がある——と云へばそれまでだが、じつと人間本来の意義を意識するとすれば、苦しい名譽の束縛であらう。名譽の監獄であらう。囚人のやうに四方八方から見られることが名譽である。

貴人はあまりに閑暇が多い。だから澤山に妾を養ふ、妾腹から出る子供等がやがては遺産を奪

ひ合ふ。兎に角、自から生活資料を儲けずに、遺産で居食ひをする。それが名譽だと思つてゐることがそもそ／＼不合理だ。

すでにメカニツク生活にうつてゐる今日、安閑と寝轉んで食ふことがいかに不合理であるか、ロシヤの貴人は、——革命の暴風に吹き散らされて、國外に亡命した時、どうやつて食つてよいか、一向糧を稼ぐことを知らなかつた。自から稼げないものは低能者である。不具者である。

頭腦は磨くところに光りが出る。高貴な頭腦だとして箱詰にしてゐる間に作用を失ふ。そして妾腹の子實はお家騒動の種を作るばかりだ。

——日本では、ぶら／＼と遊びながら食べるのが貴人だ。だから民衆の方でも、自から勞し、自から生活の糧を求めることを卑下して、貴人らしく遊ぶことが上品だと心得て勞働を卑下する。だから亡國の兆は近づいてゐる。

市民の樂屋裏

土一升——金一升と云ふ不合理な富がつねに民衆生活を毒してゐる。そして街路には森林の如き庭園を作つて、城壁の如き塀を築き、漫然と生活してゐる封建的ブルジョアに對し、民衆は一致團結して、その獨占的庭園の開放をせまらぬことも、民衆が無氣力だからやらないのである。

東京市中にある森林に似た庭園と、砲兵工廠の庭を開放しないことは——どこまでも矛盾である。砲兵工廠の移轉——庭庭解放など、實際生活の上にせひとも必要なことを冷々淡々、傍觀してゐるのが東京市民の大家である。

だから、なにつけ、かにつけ——不合理——不淨なことは繰り返されてゐる。何かの方便のためには淨化運動も起るが、ほんとうの淨化運動は——日本の生活には見られない。これは日本史がそれを證明してゐる。

マキネンの素顔

東京は世界の第何番目の大都だ。
東京は世界に類のない都だ。

なるほど東京のやうなマッチ箱式建物は世界に類を見ない。

改正道路はできた。しかしこれとても震災がなかつたら出来るはずもなかつた。

丸の内やその他、名ある建物を除けては、どれもこれも、一夜造りの建物ばかりだ。ちよつと見たところは、セメントで立派に固めてゐる。そして石造かと思はれる家も數ある。しかし一皮剥いたら、中からは針金に板屑がほろ／＼と出て来る。

外觀美、立關美は日本戦術のモットーである。外部が立派でさへあれば、内輪はどんなに貧弱でも我慢するといふのが日本人本来の戦術である。家でも、衣裳でも、外觀美が生活のモットーである。そして頭腦の本質でも、外觀だけの美しさで眞價はなくつても肩書で事が足りる

と云ふ世の中である。

偽られた生活、欺かれた生活、これが日本生活の封建的遺物であつてそのまま今日に及んでる。實に禍ひなことだ。しかし大衆の中には——その禍ひなることを知らぬものが多い。氣づかぬ者が多い。よし知つても仕方がないと云つてゐるものが多いのである。

都會の貞操帯

東京へ東京へ。

大阪へ大阪へ。

無暗に都會に集まる。

それが生活の虚榮であり。自分のふるさとに誇る都會戦術である。

都會生活は、田舎者から見れば僅がれの天地であらう。それが虚榮の的であらう。しかし生活本來の意義から云へば都會中心主義は——誤つたる政策であつた。

今日の生活難は、都會主義がもつとも残酷にそれを物語つてゐる。ロンドンの都會主義から路傍に餓死するイーストサイドの貧民を生んだ。ニューヨークの都會主義もシカゴ主義も、極貧の階級を作つた。

巴里のモンマルトルの丘の背面に、サン・ポールに、ブラスイタリーに、パンテオンの裏にせ、一ヌの裾に、見るも哀れな貧民窟を作つた。伯林の北郊を歩くと、野垂れ死の貧民を見るなど——都會主義の悲惨さはヨーロッパの大都が明かに物語つてゐる。

しかるに日本人の虚榮は都會へ都會へ——都會へ行きさへすれば虚榮が満されたつもりだ。大阪も——東京も、人口は激増する。生活の惨状は日に月に激しくなる。そして生活敗残者は、ロンドン、ニューヨーク、巴里、伯林のやうに——貧民的色彩をはつきりと描きはじめた。都會主義を放棄して都會に還へれ——大都に幸福は求め得られない。

死體の留置場！

誰もかも生活に悶えてゐる。

生活に悩まないものは——金持の子弟、貴人の家に育かれた者——不浄な金を集めたもの——それが生活の安定者であらう。

額に汗しても、生活に脅かされながらも、眞面目に働くものこそ、眞の生活者である。しかるに法網を、ぐり泥棒的行爲、欺瞞的行爲に出る者などが榮える世の中だ。

いづれにしてもゴマ化さないうで生きて行けない。まあ——なんと云ふ生活難であらうか？

生きたがためには、金を得るためには、どんな悪策もめぐらす。友を賣る、親と争ふ——時には娘も賣らうか——娘も賣り飛ばしてやらうか——生活は日に日に眞刻になつた。

そこで——結局、日本の生活は何處へ行く。行き詰つた揚句、どの方面へ行くのか？ 行くべき途があつても痛し痒しで行くことができない。やつぱり、悩み煩ふだけのことだ。そして内に亂れ、内に破れるのが日本のドタン場であらう。

サラリーマンのタバコ踊り

「八時間にしろ。」

世界の労働者は八時間を實行してゐる。

八時間は更に六時間へ進展してゐる。

労働者にも慰安の時間がほしい。働いて、食つて寝て、夜が明けると働いてまた食つて寝る、人生になんの慰安もない。意義もない。

「八時間でなくては。そして七時間でなくては。いや六時間でなくては」と世界における労働時間は日に月に短縮されつつある。

人間は生理的に——労働時間が決つてゐる。そして慰安のタイムが必要である。

労働時間短縮は西洋労働者だけの要求ではない。日本の労働者も、それを要求することは當然である。そして労働時間短縮は生産能率の上に大して變化がないと云ふのが西洋労働者の云ひ分

である。

だが八時間——それは八時間全部のことである。なるほど日本の労働者の働いてる時間は平均十時間だらう。だがその十時間の——眞の労作は五時間にも足らないだらう。そのだらしない煙草の吸ひ方、そして女を見れば擲かひ、監督がらないと、油を賣つて動かぬ。これでは仕事の能率のあがらうはずがない。仕事に對して全く時間の責任をもたない。

それは十時間労働だから、油を賣るのだと云ふかもしれない。しかし日本の労働者は監督されないでは働けない癖がある。よし八時間労働となるも、正味の労作はたかだか四時間か五時間位だらう。時間にはスピードがあつても仕事にはスピードがないのだ。

西洋労働者の八時間——七時間——六時間の定期の労作は、油をぬきにしてゐる。煙草を吸はない。タイム・イズ・チュウチーだ。労作の時間責任を自覺してゐる。正味の労作時間を知つてゐる。

しかし日本労働者はたゞ時間さへたてばよいと云ふ風だ。即ち時間がたてば給料だ。これが日本労働者のモットーである。

見よ！ 労働の半日をタバコ戦術で暮す工夫——雇人の多いことを。——いや工夫や雇人に限らず。

會社のサラリーマン、官衙の腰辨なども、やつぱり油賣りタバコ戦術の日暮しだ。監督の眼が光らなければ、雑談で時間を立てる「今日も暮れた。給料になつた。」

と、労作に對しては、全く無自覺、無責任だ。もしも同僚の中に——労作を自覺し責任を思つてせつせと働く者があつたら、その男は、おべつか者と罵られるだらう。

——労働時間短縮の要求はよいことである。しかしそれに對して労作の責任を自覺しなければならぬ、無監督で労作能率を上げるべきである。

ペンキ屋の裏切り

支那人で日本に學んだ者は日本を呪ふ。
日本人でアメリカに學んだ者はアメリカを恨む。

給料を貰つて勞働してゐる者はひそかに主人を排撃する。

アメリカで排日運動をやる先驅者の中には日本に居住した者が多い。

支那で日貨ボイコットをやる支那人の多くは日本に留學したものだ。

日本人でアメリカ排撃をやる者の中にはアメリカで世話になつた連中が多い。

世話になるものも、世話をする者も、一ツに徳望が大切である。双方に徳義がなければ排斥と

なりボイコットとなるのだ。

徳義が大切である。生活問題は更に大切である。しかし衣食足つてゐるアメリカ人の排日は、

人種問題、そして國策から起るのである。支那人のボイコットは生活問題と賣名から起るのだと

云つてもよからう。月給取が——ひそかに給料支拂主を恨むことも生活問題から起るのである。

生活問題は——人間が生きて行く上に大切な第一條件たることは喋々するだけが無用だ。

支那人留學生が——支那に還へると、すぐにボイコット屋になるから——支那人留學生は眞つ

平御免だと云ふ人もある。しかし、支那の留學生がいくらボイコット屋になつても、それは賣名

と生活問題だ——と思へば腹も立てられない。たとへいかに狂暴なボイコット屋であらうとも、樂

に日本語を話してくれることは全然日本語を知らぬボイコット屋よりはいくらかましけれない。
第一に意志が疏通する。意志の通することはなによりも便利だ。だから便利なボイコット屋とし
て見てゐれば腹もたふない。

——支那人そのものの排日性は強者に對する反感であるから——支那人留學生を大切にしてや
ることだ。サラリーマンでも同じことだその雇主が大きい雅量を持つて可愛がつてやれば、そこ
には願つても鬭争は起きない。反感も起きない。しかるに——その慈悲性がない。そこに没落——
破綻があるのだ。

彼は西！ 我は東！

日本で云ふ右傾者。

ロシアで云ふ右傾者。

日本で云ふ左傾者。

ロシアで云ふ左傾者。

それはいづれも正反對である。

日本で云ふ右傾運動は、權特ブルジョア階級から生活の保證をうけてゐる者が、そのお禮にブルジョア階級を擁護する運動である。

日本の左傾者は、特權ブルジョアからはなんの恩顧をうけない。むしろ迫害をうけ。そして日夜搾取されてゐる貧困生活の悩みが、呪となり恨となるのである。

ロシアで云ふ左傾も右傾も——それは日本の事情とは正反對の動きである。

日本で云ふ國粹者とは？

それはブルジョアに忠義振つた顔で生活賃を強奪する輩である。

國粹運動とは暴力的金銭強奪だと云はれてゐる。

日本社會運動とは？

それはならず者の集合であり。肺病患者であり。社會の落伍者だと云はれてゐる。

——それは立派な、そして男々しい事業として守られてゐるロシアの社會運動とは實において

違つてゐる。

左傾の天下を握るものはロシアの如く左傾の法律を創り、右傾の天下を握るものは日本のやうに右傾擁護の法律を守る。

ムソリーニは黒シャツ軍の黒色法律を作り、死んだダベラ・デ・ブリモはスペインの天下に滿六年間——軍閥獨裁の法律を築いた。新トルコ國のケマル・パシヤはケマル式新憲法を創つて、トルコを根柢から改造した。軍閥の一首相リバ・カンはベルシヤの皇帝を追放して、自から皇帝に即位し、リバ・カン式法律を築いた。

法律は正義的秩序である。そして常識の表現であるはずだ。しかし、時と人の力はいろくに變化する。さまざまに應用される。

——強者の天下は、さながら眞理のやうに取扱はれてゐる。

右傾も、左傾も——それは時と人の力だ。

國粹も社會主義も——それもまた時と人の力だ。

ピストル記念塔

鉛も黄金のメツキで衆議院議員になる。
 そしてこれと同じ筆法で貴族院議員にもなる。
 二院制度の上に樞密院がある。
 結局三院制度が日本の政治機關である。
 時の内閣を打ち壊はす力は樞密院にある。
 樞密院では民衆の議論を問題としないで、一個の人物が——勝手に切り廻はしてゐる。
 利己的に躍動する樞密院の顧問官は、屢々民衆政治をぶつ壊してゐる。明治の青年であれば、肉
 弾戦術で不浄な人物を膺懲したのであらうが、昭和の青年は肉弾で膺懲しようとはしない。
 鉛と黄金を——いつでも引き替へるだけの勇者はゐない。身命を擲つて、不正な政治家を葬む
 る者が出ない。日本の政治はかなり腐敗してゐる。しかし司法の権力も、悪徳な権力家には勝て

ない。
 悪徳権力家は、青年の肉弾によるの外、解決のつくものでない。
 ピストルは光る、短刀は閃く、人肉は裂ける。
 いかなる権力家も肉弾を恐れる。
 一個の鉛である中岡は黄金の原敬の命と差引して了つた。
 星亨もそれだ。
 青年の肉弾は浄化運動の實弾である。
 青年の生命と大官の生命とは鉛と黄金の差だ。
 星も原も、殺されてから惜まれた。
 青年の肉弾は尊い。鉛の如き生命もやがては黄金の如く輝く時が来る。青年が身命を賭して社
 會浄化運動をやるならば、きつと成功する。必ずやり貫ける。
 しかし命の惜しい青年はあつても、社會浄化の名譽ある事業のために身命を擲つものがゐるな
 い。

モツブの焼打ち

明治の青年は焼打を好んだ。

昭和の青年はカフェーを好んでゐる。

明治の青年は國家のために社會のために不淨な者を排撃した。そして時には焼打で清めた。

どんなに生活難が襲つても、どんなに社會が不淨でも、焼打で淨化のセンチションを起す元

氣は、昭和の青年には、求められない。青年は自分さへよければよいのだ。時代はエゴイズムに

向つて駈けつてゐる。

學校教育の普及は、青年をエゴイズムに導いた。ほんとうのことを教へない。ゴマ化しを教へ

た。嘘を教へた。

學生は眞實を求めても、眞實な生活を求めることができない。遂に自暴的行爲に出た。それに

エゴイズムが生れた。

金持のドロ的戦術

立派な面をしてゐる教師が賄賂によつて成績表を作成する。私立大學は五百圓、千圓の寄附金によつて、不成績な學生をどしどし入學させてゐる。無産の學生は千圓戦術に敗れて、入學ができない。試験地獄も、金と情實で決する場合がある。

學生は純眞であるだけ、さうした不正を見て憤慨する者もある。しかし長いものにはまかれよ我が力及ばす——社會正義はいい加減なものときらめ、日に日に濁つてエゴイズムに流れて行く。そしてカンニングな人間として社會の荒波に漂ふことになる。

「焼打の淨化戦術——など、全く馬鹿々々しい仕事だ。我等は明治の青年ではない。昭和の青年だ、自暴の青年だ、エゴイズムの青年だ。」と。

日本の知識市場は學校洪水のために押し流されて了つた。

維新の日本人は無鐵砲なことを考へた。

秩序のないその當時はそれでもよかつた。
黒船を見てびつくりしたものは維新の人である。
維新の亂世に育くまれたものは、すこしでも傑出してゐれば思ひがけぬ飛躍ができたのであつた。

今頃は、すこしばかり傑出したつて、それは問題にはならない。日本の財閥なるものは維新に生れた。當時——政府人と悪縁を結んで泥的に活躍したのが三菱となり三井となつて繁昌するに至つたのだ。

「金持を見て呪つたり恨んだりするのは自分に甲斐性のない告白だ。」

と、臆面もなく語るものがある。勿論金持になることは努力の結果だ。しかしそれだけではなれない。昔の人は、運、根、鈍、の三徳主義を尊んだ。それは金持になつた人の云ふ金科玉條である。しかしそれは眞實の聲ではない。

運——はチャンスのことだ。

根——は精力主義のことだ。

鈍——はゴマ化しものである。

ドン——はドロの變化で、まさか泥棒をすすめるわけにはゆかぬ。

鈍——即「泥」のことである。

ドロ棒行爲をやらすに富んだ人はない。だから商人は卑下されたのであつた。しかしその商人も今では天皇陛下の次に奪い人になつた。

三井も三菱も、泥棒の子孫である。それは維新奸商史に明記してある。勿論、祖先がドロ棒であつても、今の子孫には關係がない——と云ふ人もあるが、その財閥の番頭達はドロ的行爲で進出してゐる。

x

金持は偉い。

金持に弓をひくものは損だ。

と、金持にあやかつて泥棒行爲に出なければ金持にはなれない。——維新時代がそれだ。大正の財界飛躍時代もそれだ。いつの時代にもドロ的でなくては金持になれぬと云ふのが日本性のモ

ツトである。

しかしそのドロ的手段も、維新時代は容易であつた。明治時代にもやれた。しかしだん／＼とむづかしくなつたが、それについて法律をくゞることがうまくなつた。

たいていの罪悪は表面に現はれない。しかし時たま暴露されることもある。昭和の疑獄がそれだ。現はれる部分は極々瑣細だ。そして暴露されない大部分の者は、世間的に立派な態度でゴマ化しが利くのだ。

金持は自身の甲斐性だ。

金持を呪ふことはない。

——と、金持自身が、いかにも自分だけの力で金を集めたもののやうに思つてゐる。だから社会人に對しては一向に義務を負はない。そのために社会生活をぶつ壊してゐることを覺つてもゐない。もし覺つてゐる者があるにしても、それは極々少数である。

なるほど金持は、自分の甲斐性で富を集めたのであらう。しかしその富の出所は一般大衆のふところではないか。

日本性の特長は、勝てば官軍だから、敗れた者は全くの弱者だ。日本史そのものが戦史である。人間と人間の一騎打である。源平時代から以前に遡つても、それから以後、今日に至るも悉く戦争である。

その戦闘生活が日本の生活そのものであるとすれば、ドロ的であらうと、なんであらうと、勝つことが大切である。勝ちさへすれば正義だ——と、そこにヤマト魂があるのだと思つてゐる。

x

金持の考へでも、自分の富は大衆との戦闘によつて勝利を得たものと思つてゐる。即ち勝利者が正義者であると、かう思つてゐるのだらう。だから社会人に對して責任や負擔を負ふわけはない。と云つた氣持がある。

金持自身の金は、よし大衆を相手にして搾り取つた金であつても勝利者の氣持で豪然と生活してゐるから、世界の強國中で日本ほど社会事業の振はない國は他に見ないわけである。

金持の頭には社会的義務性がない。

一般日本人は無暗に金持を崇拜する。

自分も金持になりたい。あんな風に豪華な生活をしたい。と云ふのが一般人の願望であつて、どこまでも封建氣質である。だから金持に向つて社會義務を負擔させようとつとめない。負擔してくれば結構だが、無理には頼めないと云つた風だ。

社會事業の負擔は金持の義務である。

「金持は——これ／＼の社會費を負擔せよ。その負擔を拒む者は社會の公敵だ。」

と云ふ風に考へてはゐる。

歐米では、金持になると社會的負擔を名譽と思つてゐる。日本の金持位る社會義務を知らぬものはない。税金だつて、度々督促をうけなければ支拂はない。その言ひ分はかうだ……。

「税金なんかイの一番に届出る奴は馬鹿の骨頂だ。一回に幾千圓とか、幾萬圓とかの納税負擔をすぐ支拂ふものと、督促される日まで支拂はずにゐると、利子の點にどれだけの差があるか。金持は金利で動いてゐるのだ。」

と、かう云つた風の金持ちが、所謂、日本の金持である。だから社會事業の振はないことは全く思ひやられるわけである。

昭和の青年は飢ゆ

今ごろの青年に元氣のないこと。勞しても無駄だ。社會の秩序は、きちんとしてゐる。群雄割據でない。……

實力は用ゐられない。情實本位の生活だから勞しないでこつそりゴマ化して食つて行かう。どうせ食ふだけが大問題であるから、だいそれた野望はもたない。到底無鐵砲ではやれない。

昭和の青年は、生き埋めだ。

出世しようとしても方法がない。

生きることすらむづかしいのだ。

昭和の青年は何處へ行くべきか。

行くべく途が見つからないのだ。

——結局、死物狂ひで就職することだ。

どうにか就職ができれば、そこに自分の樂園を作りたい。先づ自分第一だ。自分を守ることだ。自分本位の快樂を求めることだ。大きい事は望まない。自分さへ氣樂に生きて行けばよい。

これが昭和青年のモットーであるから、明治の幻想的青年に比べると全く氣力が無い。「昭和の青年は現實に生きてゐるもの。」

現實文化を追うて生きる外に、何の樂しみさへも持たない。ハイかつた音楽やダンスに狂つて、マドロスパンツをはき、世の中を嫌がらせる。

そして、明治人に向つて、極端に反抗しやうとする。

さうでもしなければ、鬱氣を晴らす方法がない。昭和の青年は足もとに生きる外に途がない。昭和の青年は浮べないで沈み行く。

横暴な資本制度は、昭和青年の行路を防いだ。このままで行けば、青年は飢ゆるほかはない。

この首が危い！

玄關さへ立派であれば自分の内容までも立派だと思ふのが日本人の病だ。裏口から覗いた臺所の醜態を、どう思ふか？ 垢じみたサルマタをはいてゐても、上からお召でも着流してゐれば立派な紳士だと云ふのが日本人の病だ。

眞實を語らない。體裁をつくつて世渡りをする。ほんとうのことを云へば首になる。會社のことでも銀行のことでも、よし役所のことでも、ほんとうのことを云へば——すぐに首だ。自分の生活を守るためには、どんな不正でも隠さねばならぬと云ふのが日本の現實である。

學校の教師でさへもそれだ。ほんとうに臺所を暴露すれば——正しい者、清潔な者は、一人としてないと云つてもよからう。

首になるから云へない。食道を断たれるから黙つてゐよう。食ふためには仕方がない。——この氣持でゐる者が、どうして大國民たり得るであらうか。

小心翼々！

日本人はどんな場所においても、食ふための城を築いてゐる。築いてゐないものは——どうかして築きたいとあせる。

小使には小使の城がある。事務員には事務員の城がある。重役には重役の城、官吏には官吏の城がある。それがすべて食ふための城である。

もし新参者が——その城に入るとすれば、異常な氣持で見ろ。新参と古参とは、なんの親しみもない。どことなく外来者としての毛嫌ひがある。しかし、それも月日のたつにつれて古参となる日が来ると、その時は古参の同僚となつて、やつぱり同じ氣持で新参者を毛嫌ふ。

それが——どんな場面にも行はれてゐる。純粋な學生でさへも、新入生が校門をくぐる時は、どこから壓迫されるともなく上級生の威壓を感じ、自分の方から恐縮してゐる。上級生の方でも、この新入生の野郎と云つた風な、封建的な城をつくるのである。そして更に國民愛の旗下に

ある軍隊に入營する新兵に對して古参兵の態度はどうであらうか？ この氣風が果して大國民たり得るであらうか——どうか？ どう見ても愛に缺乏してゐるのが日本だ。

それでは西洋人の場合はどうだ。その生活はどうだ？ 日本人に似た病があるかどうか？ 勿論——毛嫌もある。排撃もある。しかし日本人のやうに、ちつほけなことをやらない。小心翼翼とした氣持ではない。

——西洋人もやる。甲もやる乙もやるんだ。だから俺もやつてもよい。それが何で悪いか？

——かうした氣持も日本人の病だ。他人が泥棒をやるから俺れもやらうと人に倣はうとする、人につられて行く、これが日本人の持病だ。自分の病は、どの程度にまで患つてゐるのか？

病状をしらしめることが本書の目的である。病を知る者は改めることだ。しかし、人間は——自分の病因を知ること、それを發表されることを罪惡と思つてゐる。所謂——臭いものに蓋だ。だからいかなる場合でも蓋を開けることを嫌がる。そのためにいつまでも患つてゐる。自分の病名をしることを恐れる。もし肺病だつたら——どうする？ まあ知らない方がよい。知ることは却つて毒である、いつも卑怯な考へでゐる。

そんな氣持で大國民たり得るか——どうか？ 君なればこそ云つてくれた。而も遠慮なく露骨に、日本人の病因を明かにしてくれた。ほんとうに感謝するのが當然だ——と、かう云ふのが大國民の雅量だ。

さて、この大國民の雅量をどれだけの人がもつてゐるだらうか？

金権階級の横暴

多くの人は金持を攻撃することを嫌がる。金持の我儘を許して貧民の苦痛に同情しない。金持を罵倒すると、多くの場合に顔をしかめる。貧乏人を罵ると嬉しがつてゐる。いつまでた

つても長いものにまかれよ主義を正義と心得てゐる。

一體、日本の貧民は——なぜ貧乏するのか？ その病根を知らない。また知らうともしない。たゞ金持らしく虚榮を張り、無理な生活をつづけて、大きい哲學をもたない。

國家愛——などの純眞な愛は、金持階級には見られないことである。泥棒戦術でふとつた劇場

シンジケートなどの株主や社長が、平氣で税金の滞納をやる。それは興行資本家のみではない。國家本位——愛國的核心であるべき貴族社會が、先んじて税金をゴマ化す。

口先に愛國を唱へても、眞の愛國心をもたない。金の輸出禁止が、解禁となつた。すべての緊縮政策によつて、輸入品を防いで、國産用途を奨励した。しかし金はどしどし外國へ流れ出る。

外國から輸入する舶來品なるものは、一體どのクラスが使用するかと云ふに、それは貧民階級ではない。悉く上流金持のために使はれてゐる。

いかに緊縮せよ！ と命じても金持だけは、どしどし舶來品を使つて輸入を助けてゐる。舉國一致の緊縮をやらうとしても金持だけは自由氣儘だ。そしてその結果は我等國民の寶であるべき金塊金貨が、どしどしと外に流出する。

いかなる場合においても、いい顔をして非愛國をやるのは金持階級であつて、貧民は一向に恵まれない。正義を立場とする警察でも、検事局でも、金権者には便宜を與へ、貧民無産者に對しては不正な虐待をつづけてゐる。

無名の者、或は弱い者でさへあれば、實に亂暴な方法によつて參考證人として召喚する。そし

て留置場に叩き込んでから取調べを行ふ。もし金権者を召喚することがあれば、警察や検事局では禮を厚うして、お客様らしく取調べる。——日本の世相は眞に唾棄すべきものである。弱者愛なる正義心は、今の日本には持合せがないのだ。

かうした不平を吐くと、あいつは金権を攻撃するから危険思想だ——。金持さへ擁護してれば、そこに日本愛國があるのだ——と、云つてゐる。

なんと云ふ無智、——矛盾——不合理な言葉であらうか？ 日本にはなぜ純眞な正義がないだらう。なぜ公正な日本が見出されないのか？

アメリカ人は萬歳を叫ぶ

大正七八年までの日本は、眞に新興の日本であつた。日本の擡頭はアメリカの脅威である。日本を知ることはアメリカの自衛である。アメリカの識者は日本の新興を恐れた。

そこでニューヨーク・ヘラルド紙の一記者は變裝して渡日したのが大正七年、それから大正十

五年まで、上海に本部をおいて、屢々日本に來た。彼の發表したものをみると、

「日本は世界列強の文化的長所を見出して、それを選び食ひしよう」とつとめた。ところがそれはすつかり裏切れてゐる。なるほど、形においては外國の長所を模倣したことになつてはゐるが、事實は、——各強國の短所を集めた。

日本式バラック住宅が洋化したと云つても、それはアメリカの建築様式を模倣したもので、云へばアメリカの残飯を食つたものである。よしその目標は世界文化の長所を食はうとしたものであつても、却つて世界文化の喰ひカスを食つて了つた。それが新興日本の正體であるんだ。

僕が日本に着いたのは大正七年であつた。當時の日本は、恐るべき元氣に満されてゐた。——なるほど新興的素晴らしい勢力であつたが、その後大正十五年ごろの日本を見ると、峠を越した沈滞的——退歩の日本となつてゐた。

これを形において見ても、貧弱な日本生活はアメリカの短所を拾つて、それが向上だと思つてゐる。そしてこれを内的に觀察すると、かなり複雑ではあるが、新舊人物の二ツに區分して説明することができる。

舊人は明治時代の因習を追懐して、すべての點を保守主義で守らうとし何かの幻影に迷つてゐる。そして若い者は、日本の眞價を探らうとはしない。小柄巧に食つてさへ行けばよい。——食ふためとエロ的亂舞のために全力を致してゐる。

即ち、舊日本人の保守者は、極めてエゴイズムに、自分等だけの特殊な生活を擁護して來たからそれへの反動が、若い者をして極端に墮落させるやうになつたのだ。

僕は日本の若い者と友達關係を結んでカフェーに芝居に、待合に料理屋に博奕場に入出した。彼等は日本人でありながら、日本の現狀に不満だ、眞に不愉快だと、こぼしきつてゐる。そして平氣で日本の祕密を語るのである。

日本人性情の表現であるはずの民謠舞踊を観察すると、それは殆どエロ的耽溺のものであつて民族的自暴性の暴露だと云つても差支はない。カフェーで叫んでゐる男女の歌は、亡國的音調のエロチシズムで、新興國民としての歌ではない。

キネマを見ても、芝居を見ても、讀物を見ても、悉くエロチシズムの亂舞である。殊に、今の日本青年はエロの陶酔から變態へ變態へ、探偵的奇趣、ドロのエロチシズムでなくては一向、

興味をそゝらないと云ふ始末だ。

日本の第二の國民は精神的に半亡民であるから、いかに保守的な日本の中堅が、やきもきしたつて、第二の國民は容易に覺醒するものではない。

僕は、日本を見るまでは日本を恐れた。日本を知つて了へばすこしも恐くない。それはアメリカのためには全く幸福であると云ふのは、日本人は——無理なことをやつてゐる。無理な階級を設けて、國是を樹ててゐる。それ等の人々が、ほとんどエゴイズムであり、自分等だけの生活を守つて社會と云ふものを顧みないのである。結局——時弊に眼醒めないことが、我がアメリカのためには全く幸福なことである。

支那人が支那自身の弱點を知らないために支那の統一がない。それがまたアメリカのためにはもつちの幸であるやうに、日本の保守者が日本の將來を禍ひさせ、日本の新興勢力の擡頭を邪魔してゐることは、即ち日本が向上しない主因となり、却つて自暴的に進んでゐる事情が、我が

アメリカのためには全く萬歳である。」
と、この言葉を聽く日本人は何と感ずるか？ 大に反省して新興勢力を創造しなければならな

い。エゴイズムを捨てて、社会のために動かなければならない。

震へる全権の一夜

国際會議が催されると、日本酒、ウニ、焼のり、ニシンのコブ巻、羊かん——などは全権一行のお伴をするのが習慣の一つだ。

西園寺老公のヴェルサイユ平和會議には、灘萬と花子さんが一行中の花であつた。若槻さんの時には日本酒が一行中の愛嬌者であつた。

国際全権の中で日本全権だけは、いつも食道樂で慰安を求めてゐる。日本人の海外發展には、味噌醤油と天草女郎とが先發する。いつの国際全権を見ても、古い日本の代表者で、時代錯誤の標本となるばかりだ。

時には新しい世界人としての日本の元氣を表現するだけの人材を代表させてもよからう。いつの場合にも日本は国際會議の敗北者となつて淋しさうに歸朝するのが常習だ。

勿論、全權使節となる人の苦痛は、とても想像以外の悩みであらう。實力不足の國を背負つて一等大國と肩を列べることの至難は、同情に堪へない。しかし日本酒を呑まないと發言の勇氣を失ふと云ふ全権の多いのには國際受難を痛感させられる。

全權出發は行をさかんにせよと、官民の熱はあふられるも、いざ歸國の時には全く冷めたい。熱し易く冷め易いとは、日本人性の一大缺陷である。そして國際競争裡に思ひ切つて進出のできないことも、日本人をして大國民たらしめないのである。

叛亂！ 叛亂！

「あの野郎は正直だから馬鹿だ。今の世の中は正直では食つて行けない。」

これが現代男のモットーであらう。亭主は妻を騙まして蓄妾！ 子は親を欺いて自由戀愛！ 親子骨肉でさへ心にもない嘘をつくと云ふ始末だ。

他人と他人との間は、利益を目標に陥穽で争ふ、學生は教師の目を盗んで不徳をやる、教師も

亦生徒に見つけられないやうに、隠しごとをやる。

とに角、正直者は變人か？ 馬鹿？ 世の中からは半端者扱ひにされる。一國の首相以下大臣

次官でさへ、巧妙に掛引陥穽をやつて民衆をゴマ化す時代だ。

會社銀行の主腦部もそれだ。世に暴露されない背任罪——贈收賄は、當り前のこととして黙殺されてゐる。

資本家の不正直と労働者の不眞面目との對立、生産者と商人との不正直な取引などは、日本人特殊性としてのモットーであるから。商取引の正義は容易に改善されることはあるまい。

兎に角、注文をしても支拂はない。支拂ふべきものを支拂ふのが馬鹿だと云はれてゐる。——

このまま進んで行く日本は、不正の氾濫であらう。生活叛亂時代が来るだらう。

暗黒！ また暗黒！

學者が代議士になると價が低下する。

宗教家が代議士になると俗惡化する。

聖人君子は——代議士になるものでない。代議士たらんとする者は、殺人強盜、詐欺背任者が當を得てゐる。正直者が代議士になつても代議士としての價を向上させることはできない。

しからば、代議士全部が——聖人君子から選ばれるとすれば正直な議會が生れるであらう、——それは絶対に不可能だ。議會政治は不正直の代表機關である。

法律を作つて法律を亂用するのが代議士である。どんな聖人君子でも、一度代議士になれば、たいていは毒されて了ふ。たまに立派な代議士となつても陣笠からぬけ出た時は、もう不純な代議士となつてゐる。

大臣とは利權團の親玉であること。

代議士とは投票の賣收者であること。

政治家とは詐欺師の別名であること。

——かう覺悟しておけば腹も立たない。政治屋とは正直な公人だと思つてゐるから、すべての點に矛盾が起るわけである。

「國民は政治屋を侮れ。」

——代議士とはエライ者だとの過去の尊敬を取拂つて、代議士とは利権商人なりと覺悟しておけばよいのだ。

人間を神聖化するから——後悔することになる。兎に角、日本の現代生活の革新は、どんな人が出ても不可能である。第一に國民の總意をまとめる大人材がゐる。小人物はざらにあつても、これぞと云ふ大人材を見ない。後藤新平さん輩の人物でさへも、氏の歿後に第二の後藤さへも出ないことは、日本がいかに人物人材の上に貧弱性であるか？

自己の利益を顧みないで、國民總體のために盡してくれる我利性のない大人物の出ないことは、日本が日に月に没落へいそいで行くものである。

どん底の救済

「家賃を拂はない。電話で圓タクを呼びつけて、數ヶ月も圓タク料を拂はない。」これは國粹代議

士の世渡りである。

勿論家主の方でも、我慾を突つ張る。圓タクの方でも交通人の生命價値を低級に思つて、やたらに嫌き倒して行くから、偶にはそんな目に遇ふのもお灸だとも云へよう。

宿屋を倒して行く者、料理屋を喰ひ倒す者、待合を舐めて行く者、——ほとんど倒し合ひの秘戦だ。

「どうせ食つては行けない。むしろ監獄に這入つた方が食ふだけでも氣樂だ。その上に手仕事まで教へて貰らふんだ。生活に行き詰つた時は、どうしても監獄行きだ。——その外に行く途がない。勿論今頃のかん獄は、昔とちがつて——人權問題があるから割合に氣樂だ。だからかん獄に行きたいために悪いことをやる。」

——この氣持は、生活の最底どん底に陥つた者の頭の中には、常にひそんでゐる。

「かん獄などは、うんと慘酷に……二度と來るところでない、恐ろしい地獄として扱つてゐるならば、誰も好き好んで入獄の種を作る者はなからう。」

と、云ふ者がある。一體、生活に安定がないから入獄を目的に、獄屋で食はせて貰らはうとす

ることになるので、生活の不安定が、すべての罪惡禍を作つてゐる。勿論、金の有り餘つた者が、大罪惡をやる。しかしそれとこれとは罪惡的に目的を違へてゐる。

一體——生活不安定は、何處から生れたのか？ これは政治屋と金權屋の腐敗墮落が大家の生活基礎を奪ふためである。自分が貧乏しながら——なぜ貧乏するのか？ 資本家のためにむちやに搾取された結果が——手も足も出なくなる。——その明らかな道理が、なか／＼大家の頭には入らぬ。

日本人の貧乏そのものは貧乏人の罪でなく金持の罪である。金持のみ恵まれてゐた歴史は悉く滅亡して丁へ。

白粉をのけた裸體

「人間とは——何だ。」

人間に生れて、人間とは何であるか知らぬは知つてゐてもよからう。ところが人間と云ふもの

は一番自分に近いことを知らない。日本に生れて日本を知らぬ人の多いこと、日本を去つてアメリカを旅して——初めて日本の價値を知つたと云ふ人もある。

現代生活は極端に物的化して、すべてがメカニク生活であるため、人間の善惡——人間の強弱などが、昔のものは形において、内容において、いづれも相違する時代となつた。

現代人の體を——皮剥いで裸體にでもしようものなら、野獸のやうな血汐が流れて、本能的に働いてゐるやうな氣がする。

女から化粧を取りのけたあとは。

辯護士や醫者の立關を取りのけたあとは。

政治屋から代議士の看板を奪ひ取つたあとは。

軍人や官吏から勳章を取りのけたあとは。

退職者から恩給年金をはぎ取つたあとは。

大臣大將の收賄が暴露し、賣動の不正行爲が世に知れてから後は。

刑務所の囚人にフロックコートを衣せた姿も。小便藝者を奥座敷の金屏風の前に坐らせた姿

も、一枚剥ぎ取つて了へば、悉く醜い裸體だ。

野獸である狐や狸の皮でさへ、高貴な雲上人の首に巻きつく。——人間性の研究、醜體暴露：

一枚の皮を剥いだあとの人間的價値は、物的本位に見れば、一個の生理的機能であり、心的本位から見れば、そこに尊いものが——無いでもない。さて、その實質價値の本體は？

學生はなぜ印半纏を嫌ふか？

「私は大學を出ましたから、どこか働口を世話して下さい。お願いします。」

「大學を出たと云ふことが、すでに失業者たる資格を備へたんだ。」

八九十圓の學資を使つた者が、いよく就職となれば四五十圓の月給しか取れない。月給にありつぐために學校へ行く。だから學校は就職するための幼稚園である。

有爲な一個の青年が、頭を下げて安月給でベコ働、詰襟から背廣に着替へ、中折帽を被つて、テク／＼やるのが目標である。勿論、大きい理想もあらうが、今の日本の制度では、とて

も逆も大きくはなれない。だから自暴に陥るのも當然の道程であらう。

しかし學校へ行つた爲めに、獨立ができない。學校卒業生であるために前垂れ掛けを嫌がる。

獨立の小間物商をいやがる。工業學校にゐる爲めに、印半纏をいやがる。

外國人はどこまでも勞働を神聖化してゐる。が、日本の學生は平氣で勞働者にはなり得ない。

工業學校を出ると背廣で働かうとする。印半纏をいやがる。

——これは日本教育の官僚性と、社會人の封建性とが——ひどく禍ひしてゐるのだ。工業學校

などは、印半纏で通學させてもよい。商業學校なども、前垂れ掛けで通學させてよいのだ。しか

し、それを金ボタンの洋服でなくては許さぬ袴でなくては通學ができない。どこまでも封建の遺

風だ。

學生上りの失業者が、巷路に氾濫することは、文部省當局者と一般社會とが——さうさせるわ

けである。失業者を洪水化するのは政府自からがやることであり、社會を犯罪市場化することも政府

がやるのである。

なぜ！ 学校に行つたか？

何故！ 学校に行かなかつたらう。学校にさへ行つてゐれば、もつとく出世ができたらうに、——全くなさけない、くやしい、と、こぼす者もあるが、その人達は明治末年までの人で、今では教育氾濫、知識の安市場となつて了つた。

学校に通つた爲めに、大學を出た爲めに、どうしても就職ができない。こんな工合なら、決してけつして学校へはやらない。親として學費をつくるためには、どれだけ苦勞をやつたらう。今年こそは卒業だ。やれうれしやと思へば、俸は就職で惱む。そして學費の半額さへも取れないやうな給料で稼ぐとは、全く不甲斐ないみじめさである。

自分の時代には学校はすくないし、教育をうけることは容易のことではなかつた。だから学校に行かなかつたことを悔んで、せめては俸だけでも、立派に卒業させようと思つたが、その結果は失業だ。もうこそ学校へは出さぬ。眞つ平御免だ——と云ふ親心が、これから先の學校市場に對

する覺悟である。また學校そのもの、表面は教化運動であつても、その裏口が金儲け本願で動いてゐる。所謂——食ふために學校を建ててゐるのだ。だから一般の私立學校は低能者を製造し官立校は官僚性の學生を養成してゐる。

今日、學校教育のために、どれだけ多額の費用を捨てゝゐるであらうか？ 學校で教へる知識は、實生活の前には全く無價値のものが多いのである。

無駄な時間と、冗費とを捨てた學校知識よりも、活動寫眞から受ける知識の方が、はるかに實際生活に適して——役立つことが多いものだと言つても過言でない場合がある。いたづらに學校を増加させること。學行に行くことを見榮としてゐる時代は、すでに過去の幻影であることに眼醒めなければならぬ。

——すでに學校時代は過ぎ去つた。

やがて醫者の氾濫

いくら學校出が不評判でも、いかに就職地獄でも、醫者の學校だけは、早魃がない。するぶん
醫者は多いやうだが、それでもまだ日本全土の津々浦々には、醫者のゐない村落が三千もあると
云ふ始末だ。

職業學校——としては醫學校以外にはない。醫者だ！ 醫者だ！ 醫者を目標に醫者の卵は各
醫學校に、氾濫してゐる有様である。

仁術など——と昔の聖人は云つても、この現實の社會に仁術のあらうはずはない。所謂診察ト
リックによつて、金を食ほるのが金術である。——時代は仁術から金術に向つた。醫者の性根
も、存外淺ましいものになつた。

大體、醫者は營業本位でないから醫者には營業税がないはずである。もう時代が時代だ。患
者のふところを搾つて醫者的エゴイズムをやる時代には、營業税を課してよいはずだ。

元來が、仁術を忘れて金術化すくらゐだから、お先眞暗と云つてもよいのは、二十年先にはど
れだけ醫者が増えるか？ 日本の人口から見ても、需要供給のバランスはどうなるだらうか？ そ
こいらのことは考へもしないで、たゞ醫者にさへなれば食ひつばづれがない。醫者だ——醫者だ

——と云ふ人氣が醫學校に集まる。つまり食ふために集まる。

ところが醫者の我儘に對しては、社會はどう歩んでゐるか？ 仁術のない醫者を見捨て、社
會醫術が進展して来る。公共自治體、並に新聞事業者の經營する社會奉仕の醫術が、どん慾な載
醫退治となつて新進の事業が生れる。現に生れつつある。よし、その歩みが牛のやうに鈍いにし
ても、醫師の不徳を觀念する今日となつては、信用のある醫術界を探したくなる。社會醫術の進
歩は町醫者のためには一つの脅威である。

かうなると、醫者の生存競争は、辯護士のトリックのやうに人の生命の上に及んで来る。
來るべき社會は醫者のために禍ひさせられることは、辯護士が現代の世相を混亂させてゐるや
うに、そのトリックはかなり深刻化して社會人を毒することであらう。思へば醫者の卵も、前途
は多事多難であらう。

戀愛のニキビ青年

親の威光——子供は親の前に頭を下けた。親は、子供のために特に威光を見せた。親は地震、雷、火事のやうに恐いものであつた。しかしそれはすつかり過去の話題となつて了つた。時代は親よりも子供の方を強くした。親は無理押しつけにしても、子供は不合理なことに服従しなくなつた。これも時代の歩みであらう。

今まで——子供だと思つた者が、すぐに青春のニキビ男になる。いつの間にか自由戀愛を知る。親爺の藝者買ひ、待合遊び、書妾などに反抗して一かどの議論をもつてゐる。

それは青年だけではない娘においても同じだ。親の生活不純に對しては、きつぱりと反抗するだけの勇氣がある。

多くの青年處女の頭の中には何が一つばいにつめこまれてゐるか？ それは戀の自由である。性的解放の大運動である。この本能の歩みは、貴人も、富者も、貧者も、すべての階級を通じて同一の舞である、同じ希望である。

このために封建的家庭は一大恐慌を來した。叛亂！ 逆襲！ ととも人間の本能には勝てない。束縛、因習、傳統に反抗して、自由解放の根強い念願によつて、モボ、モガは生れてゐる。

家庭人はこれを何と見るか？ 社會人は、これをどう判断するか？

娘のレツテル

娘は親爺の心を知らず——モダン細君は亭主のふところを考へない。衣、食、住の家庭經濟の合理化も、嬢の虚榮のために、反亂を見ることがあるだらう。

勿論女はレツテルが商標であらう。それは美術から出たと云ふよりも、美人らしく見せたい。

この虚榮から化粧に身をやつすのが女の生命でもあり、また仕事でもあらう。女の衣裳は、その人の好みくではあるが、その衣裳を見て、美的鑑賞が、いかに低級か？

いかに高級か？ 一見すればすぐ判る。

恐ろしいものだ。化粧の仕方、衣裳の柄を見れば、その女の出身履歴までが、すつかり明白になる。白粉のつけ方、衣裳の着こなし、帯のしめ方、髪結び方、下駄、傘、そして女の歩きぶりを見れば、その女の履歴は調べなくともはつきりする。

それだけ一般的に美的鑑賞が等分されてるない證據だ。フランスなどでは、勿論——女人の女は、すぐに判るが、あの女は下女か事務員か、女教師かお嬢さんか、それ等のデリケートなことは、ちよつと見ただけでは断言ができない。そこへゆくと日本の女は——すぐに断言ができる。なるほど教育の程度においてはフランス女には敗けないであらう。しかし、囚はれ過ぎた身のこなしは、すぐに判つて了ふ。

女教員タイプ——

事務員風——

下女スタイル——

お嬢さん、後家さん、藝者、娼妓、ことに失業婦人までも——その一切が判るわけである。なぜ——判るか、それは職業に拘泥するからだ。そして趣味性の發達しない證據だ。

同じ民族であり、ほぼ同じ教育をうけても、職業的に、境遇の差が生じると、日本の女性は外的にも内的にも、種々な差別を起すのである。

どんなにしても封建性がぬけない。そこに女の煩ひがあるわけである。職業などにこだはらな

いで、自分の自然美を知つて、それに調和するだけの衣裳と化粧を美のモットーとすればよい。

大都是沙漠の牧場

都會は沙漠だ。——それは砂塵をまき上げるから云ふだけではない。都會は氾濫だ。——それは雨の日に街路が川になるから云ふわけでもない。

人の心が——沙漠であり、氾濫であり、地震であり、火災である。都會生活に人間愛が缺乏してゐる。何の恩情も見えない。たゞ自分だけだ。自己第一だ。

自分の家のお隣に、誰が居るのか、引越そばは形のやうに配つても、ほんとうに人間味のある交際はしない。どち等も遠慮だ。引込み思案だ。互にボロを隠し合ふ。眞の親切味がない。そして近隣の番地さへ知らぬ人が多い。

俺の知つたことぢやない。何の関係もない——と、どこまでも借家人根性だ。なるほど、今日この家にも、何時引越すかもしれない。沙漠の都會を牧民のやうに轉々と

移動するのが、日本人の都會生活であるから、家に親しむこともすくない。隣人へのなつかしきもない。たゞ形式だ。その場限りの逃げ越だ。お互に「この馬の骨か？」と云つた風で、ヤマト民族の親しみも愛もない。

「ハハ、大和族民——なんのことですつて。」

この氣持で四海同胞——は、虚偽の叫びだ。だから愛がない。愛がないから残酷な犯罪は日毎に新聞を賑はす。

この愛の無い不愉快な氣持は、借家町の氣分だけではない。下宿屋にこもる學生でも、サラリマンでも、一ツ下宿で、顔と顔を、ぶちつけるやうに接觸させても、自分から「お早よう」とは云はない。先方が下手に出れば、挨拶もしようが、たゞわけもなく口を利く理由がない。かうした愛のない私の強い虚榮が、下宿町にも宿屋町にもどんなどころにもあるのだ。

もし、ふとしたことで口を利き合ふと、ムチャクチャに親密になる。——その揚句は、世話を頼むか、金を貸してくれと云ふか、交際にも断末場がある。あ、かかり合はなかつたらよかつたに。

つまりぬ奴と交際した。すつかり馬鹿を見た。

かうしたなげきも日本人特有のものだ。兎に角、愛に缺けた人間だ。口先では親切さうでも、腹の中は二重だ。

二重人格、二枚舌などは、政府人でも、議會人でも、教壇の人でも、——いかなる人も平氣で使つてゐる。責任をのがれようとする場合には、いつもそれだ。中橋の文相時代の二枚舌、濱口の二重人格、財部の二重動作、それが國家の重大な問題である場合にも、自分一個の責任を考慮して、國家愛、國民愛、社會愛を忘れ、兎に角、首にならぬやう、引責辭職にならぬやう——それが現代人のモットーである。

つまり眞の愛がない。大なる愛がない。上は大臣から下は借家町の貧民まで、愛に缺乏した沙漠に住んでゐるのである。——大都會は眞に沙漠だ。田舎には愛はあるが、情實的にこたはつた愛である。

「大都會よ。汝のハートには愛が消え失せたのか？ 都會に漂ふ借家人よ、汝等の心には、眞の愛は芽生えないのか？ 下宿屋にさすらふ書生よ、サラリマンよ、何故に眞の愛を求めないの

か？ 社會愛を要求しないのか？」

結婚牢獄に悶ゆる

「君も獨身時代には、實に愉快な男だったが妻帯すると、うつて變つてしみつたれて了つたね。」
「いつまでも子供ぢやないよ。俺だつてもうすぐにパパになるんだもの。」

その變化も自然であらうが、獨身時代の友人が妻帯後には、きつと縁遠くなるのも、畢竟するに友情に徹底味がないからだ。單に眼の前の境遇にこだはつてほんとうの人生を忘れるのである。家庭的に——經濟的に——仕方がない。やむなく引こみ思案になる。舊友を捨てなければならぬ。俺には休むだけのねぐらができた。即ちホームがそれだ。嬢は——終日家にて、俺の歸宅を待つてゐる。先づ嬢を慰めてから、その餘力を友人に向けよう。

この氣持は、誰も同じことであるから、それでよいわけだ。しかしこの氣持が、そもそも日本人の禍ひとなるのである。

ホーム愛にさへ生きてゐればよい。社會などは、どうでもよいといふ風だ。勤先と、——家庭さへ圓滿であれば、友人や社會の交際は、何も考へなくてもいゝ、——と。
これが家庭人の本音だ。だから社會愛の發達は邪魔され、家庭中心の家族愛が日本性の中心となるのだ。しかしその家族愛と云つても、親戚に厄介者ができれば——その時は自分に迷惑のからぬやう、喜びでもある時は第一に獨占しようとする。どこまでもエゴイズムの生活だ。なぜ——こんな社會が生れたか？ これは封建的虛榮の現はれた。エゴイズムの支配だ。
勿論、世界いづれの國にもエゴイズムはある。しかし日本人のもつエゴ性は、全く社會を顧りみないエゴの獨占である。それが封建的に、實に長い歴史をくゞつて今日に及んだものだ。そして更に西洋のエゴを加味して變てこなエゴ性を構成したのだ。
汝等日本人よ！ 日本性のエゴは眞に呪はしいものだぞ！

スピードの貞操

ロンドンのはてから、生々しい肉聲さへも聞えて来ると云ふラヂオ時代は、更にラヂオの飛行機操縦の時代をも近い将来に——見せるであらう。もうすぐロンドンやニューヨークの芝居をテレビジョンによつて家庭的に見ることができよう。

世界の國境線は、日に月に縮まつた。なんでもかでもスグ日本にわたつて来る。自分だけが時代の尖端を行くものだと思つてゐる間に、時代は高速度のテンポで、次から次へと移つて行く。

——この新時代に、古い頭の中に過去のほこりのみをつめ込んでゐる者は、いつとなしに新勢力のために押しつめられて行くわけである。

けれども、新時代の産物なら何でもいいわけではない。海を越えて来る流行が、すべてあり難いものではない。

アメリカ式自動車密會も、半裸の酒地肉林のダンスも、スピードの友愛結婚も、ナイトクラブも、ステツキクラブも「それ等のエロ的耽溺が、一つの流行風潮となつて、日本にわたつた。

しかしそれらは金權警察のために壓へられて一般庶民は、とてもその酒地肉林を夢みることはできない。警察も嚴肅に取締つてゐるけれど、それは一般庶民を取締るのであつて、金權社會の

ブル階級を取締るものでない。

カフェーや酒場を取締つても、金權の出入する遊蕩の地獄は、待合の奥座敷に、極端なエロ性を樂しみ、有産階級のエロ男によつて、多くの日本女性は、貞操を弄ばれてゐる。

資本主義のつゞく限り、社會はつねに惱まされて、波紋をまき起すのである。非道義的なエロは資本主義をめぐつて、金の前に女性は殺到して行く。金の力は、——貞操を打ち破ぶる時代である。

銀座の不良化氾濫

時代の尖端！ まるで口癖のやうに云はれてゐても、はたして何が尖端か？ 無電柱のとツ端

しか？ それとも東京市公會堂の屋根の尖か？ それとも賄賂の嫌疑者か？ 尖端を危なく綱渡

る者が更にせん端を行つて世をゴマ化す。
「尖端！ それは銀座の夜景だよ。」

銀座がモダン様式の尖端であると思つてゐる人は、十中九人まで——それであらう。その壁一枚を剥ぎ取つたら、中味は板と針金ばかりだ。それでも、銀座にはスペイン風あり、フランス風あり、ドイツ張りあり、何々あり——銀座は眞に時代の尖端を行くものである。見よ！ その街上にはせん端的なモガ、モボ、これに共鳴するモダン黨が、銀座街道に氾濫してゐる。銀座はモダンのせん端だ！ と、尖端の意義さへ知らぬものは——銀座の價値を知らないのである。

銀座！ あれは假小屋である。夜は電氣で扮飾されたまでのことだ。先づ銀座の建物を見よ。バラック街を裝飾したものではないか？

よし、七割主義の海軍をほこつても、銀座が全国的に模範街だと云ふから、アメリカが日本の貧弱さを鼻先でけるのも當然だらう。

我等は、——それが癪である。アメリカに勝たんとするものは銀座を以て、全國第一とほころことを止めよ。ちつほけな氣持を捨て、眞に底力のある新文化の尖端に立たなければならぬ。でなければとても、アメリカの暴壓には勝てない。

更生のない青年

「何か適當の仕事がほしい。」

と、泣き面で——駈けずり廻つても、どうにもできない。日本の社會組織は公平に食へないのが特長だから就職はできにくい。だから學校出の青年の悩みは、かなり深刻なものである。しかし、これを切りぬけるためには、あちこちに秋波を送つた揚句やつとチヨツピリの月給にありつき、蔭ではぶつくこほしながらも、いざ——積極的には反抗もしきれず、たゞ胃袋のために前途のない仕事を、嫌やくで守つてゐる間に、いつの間にか老いはてて了ふ。

生活！ 人生！ 何が何だかわけもわからずに生きのび、若い血のみなぎつてゐる間に、この不公正な社會制度を徹底的に改革しようとする熱心な青年も出ない。たゞ高い學資を使つて、カフエーの女給にうかれるだけが人生であつて、薄志弱行の青年は、現代文化の副産物となつた。そして、更に不良少年を製造して了つた。

どの青年を見ても、時代的に倦怠した疲勞者である。社会的に自暴性の安樂を求めて、眞剣に人生を探つてはゐない。そして今の青年には全く建設性がない。建設は破壊の後に來るべきものである。破壊のない青年には建設ができやうはずはない。破壊なしで建設すればよい。——それは到底できない相談である。

更生！ 更生！ 口癖のうに、更生を云ふ。しかし更生は死滅の後にこそ、眞の更生があるのだ。不正なものを撃滅させ、不純なものを焼拂つた後にこそ、眞の更生があるのだ。

口先に、更生！ 更生！ を唱へても日本の現狀に、更生を見ることはできない。ことに、青年の更生！ これが全くゼロである。

都會に口がなければ田舎で親爺の脛をかじればいいのだ。しかし田舎で類廢的な家族制度をまもつて、ぶら／＼するのも氣はづかしくなつて來る。近所への體裁をも考へ、遂に再び薄情な都會を追つて、喧騒な東京へ。大阪へ。そして、再び失業洪水の中に、就職地獄の中に陥ちて、はかない聲で、憐れつほくあへぐのである。

眞に——生活に對して眞面目でない。つねに裏切りのできる人間達である。死を賭して眞剣な

生活を求めようとはしない。樂に浮びたい。それがもつとも小懶巧だと觀念しきつてゐる。

ロシアの社會改革者は、ロマノフ王政の、ひどい壓迫をうけた。けれど、ロシアの更生は、青年の手によつて成就したことは明白である。今まで壓迫者であつたものは、更生した新勢力のためには被壓迫者となつて了つた。

多年、エロ的歡樂生活に陶醉して來た、舊ロシアの勢力者は、革命の聲と共に、地位轉倒、悲惨な敗北者となつて了つた。しかるに、それ等の白系ロシア人の意氣地のない行爲は、全ロシアの國境線外にあるロシア亡命白系の統一を破つて、遂に再起のできないまでに叩きつけられて了つた。

それは武力でなく、精神的に叩きつけられたのだ。更生への希望がない。氣力ががない。昔のエロ的情性がたつたつて、潑刺たる元氣を失つて了つた。

日本の青年がそれだ。更生——身を捨てて更生しなければならぬはずの青年は眞に無氣力だ。日本の青年は不良少年となる術を知つてゐる。カフエーのエロ主人となることを願つてゐる。そしてくだらない民謡を唄つて、類廢的ななさけない氣持を見せつけるのみだ。

青春期をどうした？

アメリカ・インディアン（土人）は、衰亡民族として亡んで行く。今日の富のアメリカを所有してゐた舊主人であるインディアンを、なるべくなら保存させたいと、アメリカ政府は、土人保護地を區劃した。そして悪徳な者が土人を欺して土地を掠奪しないやうに、土人には土地賣買を禁止した。

土人側から云へば、自分等の土地は賣ることも買ふこともできない。全く壓迫監禁されたものだと思ふものがあるが、それは立派な弱者保護である。

アイヌの保護にしてもアメリカ・インディアンのレザアールベーションを真似たものであらう。それ等のインディアンが、夕暮に哀れつほい聲で唄つてゐる姿には、何とも云へない悲しみをそゝられる。手も足も出ないインディアンの生活が、歌によつて慰められてゐる。その聲は眞に哀調そのものだ。

日本の青年も、手も足も出ない。夜陰に唄ふ彼等の聲は——何と云ふ自暴性のものであらう。カフエーで唄ふ調子も全く半亡的哀調がみなぎつてゐる。蓄音機でも、ラジオでも、安芝居でも、ことごとく亡國的な——くだらない音調が世間から歓迎される時代だ。日本の色彩、日本の音調は全く青年期を過ぎ、急に初老の衰弱を示した。あまりにも早く衰へて了つた。華々しい青年時代はほんの束の間であつた。かくして日本は——初老の衰境を追ふのだ。

危ない尖端に立つもの

今日の日本は道徳的に大震災の世相を描いてゐる。貞操の動搖、エロ的亂闘などは、かならずや搖籃な文化極致の断末場に、吹き荒ぶ魔風である。しかし日本は、まだ世界にほこるだけの搖籃な文化を建設しない時に、この魔風に襲はれたわけである。

彼の寺内大尉夫人が愛のために殉死した事件が、二十年前であれば、婦人の逸話として、世人は尊敬したであらうに。

二十年も連れそつた夫を捨てて愛見を捨てて、色魔藤原のふところに、愛の石碑を建てた松永あき子夫人は二十年前の日本であつたら——どんなに冷罵をあげられたことであらう。

石原純さんは著書を書くために、わざとエロ的エピソードを仕組んだとまで云はれてゐる。原阿佐緒さんは、中年婆としてエロチシズムの尖端に立つて、よく新聞紙を賑はせてくれた。そして生々しいゴマ鹽を染めて、藤田のオカッパ式断髪式の尖端を歩んだ。そして今では酒場の尖端を駈けるために女主人となつた。

時代は推移した。エロの道德律が違つた。柳原輝子さんがアカガネ御殿を飛び出した當時は、世間から冷笑されたけれども、それが昨今のことであつたら、テナー藤原を追つかけた松永あき子さんに對するやうに世間の軽い笑をうけたまでのことであつたらう。

三浦環さんが自轉車に乗つたと云つて、世間がびつくりした二十年前の日本は、すつかり姿を變へ——舊道德律には眼を覆ひ、頑迷なものを毛嫌つて何かを譏美してゐるあり様である。この

變化は勿論囚はれた封建に對する反動にはちがひないが、このままでは民族的に——早く衰弱することはたしかである。

尖端を歩む者の末路は？

圓タクの飛び出た時「あ、時代の尖端を行くものだ」と云つた。圓本が世に出ると、出版界の驚異だ！と云つた。

女文士がカフェーを開業すると、時代の尖端に立つものだ。無産黨員の處女演説を聞いて「あ、尖端の雄辯だ」と、何でもかでも、尖端を行くとか——立つとか？ いかにか輕薄であらう。

今——時代の寵兒となつてゐても、またすぐ忘れられて了ふ。

老いほれた西園寺さんでも、昔は時代の尖端に立つたこともあつた。福澤諭吉さんは維新直後の日本において、誰よりも進んだ時代の尖端を歩いた人である。

大隈さんにしても、伊藤さん、板垣さんにしても維新直後における時代の尖端を綱渡つた人達

である。ところが福澤さんの歩まれた時代の尖端は、ブルジョア階級を創つて了つた。伊藤さんの時代尖端の歩行は官僚を創り、政治閥を作つた。

過去の時代を突破して、尖端を行つた人達は、いづれの方面にも閥を作つた。労働運動の尖端に立つ者でさへ、今日すでに自分達の閥を作つた。繪の具で時代的美術界の尖端に立つ人が繪の具黨の閥を作つた。

どんな場所も、時代的尖端を駆つた揚句は、たしかに閥を創造してゐる。空中の尖端を歩く者でさへも、すでに航空界に閥が出来たと云つてゐる。

筆をもつて尖端を歩行するものでさへもすでに筆の閥が生れて、自由に閥入を許さぬと云ふ社會である。

尖端人の最後は、必ずや閥である。今にカフェーの尖端を行く斷髮女主人も、カフェー閥を作るであらう。

尖端的な革命性の道德は、いつの間にか支配階級の道德となつて、閥の中に棲息することになるのである。

手段を選ばぬ出世！

生まれおちた日から出世！ 出世！ 出世のモットーは何であるのか！ たゞ無暗に出世するんだ。坊やはエラクなるんだよ。老婆の目標はたゞ出世の一字だ。

その出世と云ふことには、何の根柢もない。衆人にぬきん出ると云ふのか？ 目的のためには手段を選ばなくともよい、思ふだけの金さへ手に入ればよいと云ふのか？ 今まで蹴飛ばされたものが、今度他人を蹴飛ばす身分になればよいと云ふのか？

別荘で遊ぶ身分になることの意味か？ 株券をたくさん持つことか？ 蓄妾のできる身分にまで潜ぎつけたことを云ふのか？ 平民から人爵を貰ふ身になつたと威張ることか？ 出世そのものの本算が全くはつきりしない。臆蔵として取り止めもつかぬが、しかしどんな手段でもよい世間に知れないやうに巧妙な手段で——勳章でも貰へる身分になつたら、それが成功と云ふのであらう。金だけでは出世ではないのだらう。金持が、勳章を買ふ、貴族院議員の席を買ふ。華族

を買ふ——つまりそこいらが出世の断末場ではなからうか？
だから誰もかも出世をいそぐ、處世成功の秘訣を求めようと焦慮する。——それに向つて手段を選ばないことが現實暴露となるのである。

エロの捕虜となる

出世をいそいで、脚下を見ない人が多い。そのために、多年の辛酸を反古にする人がある。畢竟——それは盲人と同じわけである。この人生は脚下だけに生きてゐるのではない。一生涯の眼のつけ所は遠近いづれにも用意周到でなくてはならぬ。いかに重大な働きをなすか？ そのことを考へねばならない。
眼の着け所が悪いと、取るべきものを取らず、却つて取るべからざるものを取る。つまり日本の文化的建設などを見ても、西洋のものならなんでも取りこむと云ふのだ。取つてはならぬものさへも取つてゐる。

中にはいいものも取らない。自分のものを最上のものとして他人のもつものは價のないものと偏見をもつてゐるものもある。人間そのものの生活は平凡々なやうではあるが、眼の着けどころ如何によつては、平凡でないものに轉化させることもできる。これが人生の趣味ある仕事だ。社會生活の妙味はそこにこもつてゐるのだ。けれど、人生をいつも苦悶のどん底に、そして生活を忍苦の結晶だと思つた結果、その反動としてエロ的ユートピアが輸入されると、わけもなくエロの捕虜となつて了つた。全く無氣力の人間を創造して了つた。それは脚下しか見なかつた爲めである。

新勢力は勝つ

壓迫の手は凡てにおいて勝利だと、無暗に壓迫した結果はどうなる？ ロシア政府が數千の僧侶を虐殺して宗教を根こそぎにしようとした。しかし遂に根絶することはできなかつた。このロシア政府も十餘年前に遡ると、當時は漂泊的な虚無の徒であつた。時の支配者ロマノフ王

朝の壓迫は水も洩らさぬほどであつたが、その支配者は亡ほされて、壓迫された徒が今の支配者となるに至つた。

イギリス政府が、印度人の革命を邪魔するために宗教闘争の同志討をやらせ、民族を疲弊させるために高い鹽税を課して、一般庶民の元氣を鈍らせ、あらゆる方法によつて印度獨立を妨害してゐるにも拘らず、その壓迫の下から、ガンヂーの正義の絶叫は起る——そのガンヂーもイギリス官憲の手に捕縛されると、女詩人サロジニ・ナイヅ女史は、ギリシヤ獨立の犠牲となつた詩人バイロンのやうに、獨立を叫んでガンヂーの後を繼いだ。

近き日本史に遡つても、維新の革命家は徳川のために根こそぎされても、徳川を亡ほすことができた。時代はいかなる場合にも、新勢力の生れる時は舊勢力を壓倒しようと押しかける。舊勢力が——新勢力を撲滅せようと奮闘するの、時代闘争として止むを得ないことである。

日本の舊勢力に倦怠した者は新勢力を固めて舊勢力に闘争を賣つてゐる。これも維新における闘争のやうに、やがて勝敗は決せられる時が来る。

徒らに壓迫さへすれば、そこに支配者の勝利ありと思ふ者は、有爲轉變の歴史的反映を知らぬ

輩であつて、歴史は繰り返しながら、常に新舊勢力の闘争をつづけて、新勢力は、あきらかに舊勢力を滅亡させるだけの自然的勢力を備へてゐるのである。没落者は新しい者でなく古い者に限られてゐる。

人間魔の三等客車

どの三等客車も満員、腰さへ下ろす席がない。

東京驛から——上野驛から——梅田驛から——。

全国に擴がる鐵道網の三等車は、芋を洗ふやうな混雑さだ。しかしその反對に、一二等はいつもガラ空きで至極閑散なものだ。

革命前のロシアの一二等は、バス特権者のために動いた。日本汽車の一二等も、ほとんどバス特権者のために充てられてゐる。そして冷酷にも三等客虐待をやるのだ、イギリスの鐵道は三等大家によつて收得してゐるから、三等客優遇の方法を用ひてゐる。

封建の産んだ日本は、どこまでも階級を捨てない。乗客の生命と一緒に脊負つてゐる汽車でさへも階級根性だ。

——ほんとうの自分は何であるのか？

——社会的の自分とは何であるのか？

三等といへば我勝主義のものだ。争奪的のものだ——4の一番に駆けつけ、自分だけに都合のいい腰掛さへ独占すれば、一と息ついて、

「あ、よかつた！」

と、自分だけのためによかつたのである。それは當然の権利だと、自他ともに平気でゐられるのである。所謂——日本性の強い者勝ち——早いもの勝ちの封建因習が、一般大衆に觀念づけられてゐるのだ。

それがいいことだ、當り前のことだと、あらゆる場所において、我勝の亂闘を繰り返すわけである。

金持こそ危い！

「自分は金持だ。自分の利益さへ擁護すればよい。」

俺の金は——俺の智慧から産まれたんだ。

社会が何だ！ 社会などに尊い黄金を、どうして捨てられよう。然しだ。そのために利益があるとか勳等が貰へるならば寄附しよう。まして貴族院議員になれるならいくら捨ててもいい。

かう云ふ金持は、藝者と云はず、妾と云はず、自分の好むものためには平気で萬金を擲つ。所謂——自分の金だ！ 自分の勝手だ！ と思ふのが日本の金持氣質である。

「自分さへよければよい」と人を泣かせて儲けるのが日本の利殖法である。つまり自分さへよければよい、利己的エゴイズムの由来は、一體どこから生れたのであらうか？

マルキシズムが國境を越えて入國すると、利己的だ、エゴイズムだ、危険思想だと呼ばれた。危険思想は輸入と云ふよりは、日本固有のものである。

自分さへよければよい。自分第一主義が即ちエゴイズムである危険思想である。この氣持は、誰が植ゑつけたであらうか？

貧乏無産者から種を蒔いただらうか？

金持有産者から植ゑつけたであらうか？

日本の金持ぐらゐる社會を見ない金持は、他の世界にはないと云つてもよい。自分の富は社會人を相手に——儲けたのだと云ふ外國の金持のもつ觀念はもたない。だから社會のために私財を投

け出す者は、數へるほどもない。

日本の金持たちの「自分さへよければ主義」所謂エゴイズム——これが即ち危険思想だ。社會生活を毒する思想である。

日本の金持にしてこの利己主義を捨てると、捨てないによつて、日本の没落的運命が、早く來るか、遅いか？ この二つに分れるわけである。

無産者も利己的危険思想だ。しかし金持も更に利己的危険思想だ。

私は敢て云ふ——危険思想とは利己主義エゴイズムが——それであると觀念してゐたい。危険

色盲の現代人

思想の根本は有産金持階級が先だと斷言する。

ちよつとでも、道路のことを云へば、「判つてゐるよ——また道路の話か？」と云つた風だが、その實——判つたと云ふ人、それ自身が一向に判つてゐない。もつとも煙草の吸殻を捨て、紙屑を打ちやり、たんつばを吐き散し、小便をするには、遠慮も氣がねもいらぬのが日本の道路である。

公德心が無用だから、小便の時に巡査の來るのさへ警戒してゐれば、誰も文句を云ふものはない。一體——道路そのものは他人のもので自分のものでないから、誰が何をやつたつて、一向差問はないと心得てゐる。ところが一寸一尺でも俺れの門の内に——吸殻だの、紙屑だの、たんつばだの、小便などを放つたら、それこそ用捨はしない。手も足もヘシ折つて了ふぞ——と云つた調子に自分の所有權を守ることに、實に實に忠實である。ところが社會的所有物——自治

國の所有物だと思へば、俺のあづかり知るところでない——と腹をきめ込んで、どんな不埒なこともでも傍觀してゐる。

「日本人に社會的公德心を求めたい」と云つたところで、それは容易のことでない。しかし警告しないわけには行かぬ。黙つてゐればそれこそ眼醒める時がない。

馬鹿ツ泥水をかけるな

道路は車馬と人間の通るところだ。さう思つてゐる日本人は、風の強い天氣の日に、都會が——沙漠のやうに——塵埃をまき上げてゐるのを見ても、風を恨んで道路を恨まない。一年に巨萬の金を捨てて、道路に撒水してゐる。あれは埃の散飛をまじなふものだ——とさう思つてゐる。ところが撒水夫は、雨でさへなければ春夏秋冬——のらりくらりと撒水車を引きまはしてゐる。無職者に職を與へるつもりで撒水車ならば他に授産法もあらうに。——あの撒水車のために履物を腐らせ、衣物を泥に染める人が、どれだけ多いことであらうか？ 今、撒水したと思つても、

夏の日には、撒水するその後から乾いて行くのだ。

外國人のやることなら何でもいい事と思つて、すぐに道路撒水を真似てゐる。一體、外國都市の道路は、道路の泥を撒水で下水に流すのが目的ではじまつた。しかるに日本では、道路のゴミが沙漠のやうに散飛しないためにやつてゐるのであらう。

外國では、市民の寢静まつた真夜中から道路を洗ふ。——日本のは洗ふのではない。道路をびちやびちやと浸すだけだ。これがよほどいい事だ、國情に應はしいことだと思つてゐるのが模倣性——猿智慧の缺陷である。なるほどトラホーム菌の培養には適してゐるだらうが、撒水のために却つて沙漠を造つてゐる。一時ふせぎ、その場だけ、濡さへすればゴミは舞はないものだと思つてゐる。根本的に——ゴミ退治のやれぬのが日本人の頭だ。

一時的——その場主義の撒水によつて、道路と通行人の害されてゐる無用有害のことを平氣でやるのである。

コラ！そこは道路だぞ！

毎日道路に立つてゐても、道路の價も知らない。歩道を横ぎるにも脅えながらウロつき、道路を愛することを知らぬから、道路の活用を識るはずがない。

まあ、道路の活用と云へば、自分の廣告紙を張りつけることがそれだ。道路であれば、彼方此方——どんなところでも遠慮なく張り散らして平氣だ。よし、「貼紙お断り」とあつても、知らぬ顔で貼る。先づ都市美などの社會的連帶責任には全く無頓着である。

そして遠慮なく「樂書」をする。板塀に小便をかけて得意がる。「公設便所がないから止むを得ない。」

と理窟をつけては犬のやうにさつさとかけばる。

「道路と住宅」——これは實に雑多だ。道路に門構へあり、立關あり、庭あり、道路は俺の家の通用路だと云つた風に自動車置いて、交通を妨害するものがある。しかし、それを見た巡查は、

その屋敷が、誰某であると云へば、その門札だけの威光に恐れて、見ぬ振りで避けて行く。もしも、圓タクなどが——そんな眞似でもしようものなら、
「コラ〜圓タク！ 貴様は規則を知らぬか？」
と威猛けだかで一喝する。日本は實に道路受難である。

スピードの奴隷

自動車のために、民衆の歩行は、どれだけ妨害されたであらうか？ なるほど、自動車を利用する一部の者には、その仕事の能率が、高速のスピードで恵まれるであらう。だが、いかに圓タクがあつても、民衆はいつも利用することはできない。

で、自動車所有者の仕事能率のスピードのために、一般民衆は、自分自身が、不自由な思ひで、交叉點に突つ立ち、命懸けで道路を横切ると云ふ、道路魔時代が來たのである。

電車が大衆的に動いて、上下の階級を区分しなかつたが、自動車亂用の時代となつて民衆を階

級化して下つた。

勿論——スピード時代の文化的機關を、日本だけは用ゐてはならぬと云ふ理由はたゞない。しかし、自動車を利用する人は、いつも民衆の道路と云ふことを考へてゐて貰ひたい。

「いや、俺自身は民衆を考へてゐても運転手がやるんだから——」

なるほど、そこにも理由があるだらう。運転手そのものが、いかに身勝手なものかはずでに定評のあることだ。何時失業者になるか——明日の安定さへない運転手が他人の自動車を、自己の所有の如く、民衆を屁とも思はずにドライブする——彼等の心理作用は、低級な自分第一主義に生きてゐるからである。だから、一朝失業すると、民衆と同じに、テク／＼と歩んで自動車を呪ふであらう。しかし、一旦就職して、自動車の車臺に上ると、もう成金振つて、民衆を眼下に見くびる。こゝに日本性のもつとも露骨な、もつとも忌々しい點を暴露してゐるのである。

外人の冷笑を見て

觀光誘致はよいことである。しかし、アメリカの觀光客が——帝都を見物して曰く、

「東京見物にはボートが入用です。」

そのことばを、日本侮辱だと思つたら日本人には進歩がないわけである。日本人それ自體のよくない場面を、忠實に懇切に發表して呉れるものこそ、日本を進歩せしめようとする念願である。外人を誘致するは易いが、外人に満足を與へ、日本を感心させることは、餘程に難事業である。外國人が日本を攻撃する場合、或は冷笑する場合は、日本人それ自體が日本を攻撃し罵倒する場合は、その心理作用に、大なる相違があるはずである。

日本が没落しないやうに——没落の運命を切りぬけて、誕生の運命を拓かんと願へばこそ、日本人そのものを攻撃する場合もある。

「良薬は口に苦し」攻撃は日本のためであり、次の誕生に向つて、新鮮な血液を注ぐものだと思はなければならぬ。

大なる雅量に育つ大國民であるならば「日本の没落か？」を見る者は、日本のために、日本の蘇生のために——躍動してゐるものだ——さう考へて貰ひたい。

金の無い日のどん底記

ポケットに一文もない。

一文を得んとあせつても働くべき仕事がない。一人で三人分を稼ぐ者もある。一人で半人分さへも働けぬものもある。

腹はへつて来る。うどん屋の前を通ると、いいにほひがブーンと鼻をける。とても堪へられなくなる。フラフラと、うどん屋の暖簾をぐくつて、空椅子に腰を下ろすと、小僧が、
「何にしませう？」

「……………」

じつと、臺所を凝視した。

「かけですか？」

「カケでない、モリでもない。」

と、横に頸を捻ると、小僧はさも當惑さうに、
「では？」

「まあ、待てッ。」

じつと考へこんだまま、椅子を占領してゐた。

「この客は——金なしだらう。」

と、うどん屋の主人は、あさましさうに、せせら笑つた。

金がない飢ゑさうだ。うどん屋の臺所を見ては、もう動かれない。椅子にへばりついて了つた。客商賣の主人は、入替の客待ちをしてゐても、一脚の椅子は占領されて了つた。

「食べないなら入替つておくれ。」

と、主人は眼を光らせた。その時、ポケットから銀側の古時計を取り出した。これを見た主人は、

「これをどうする……………」

「時計で食ふ。」

うどん一ぱいと時計との引替へ、主人はニコツと笑顔して、
「へい——へい」

この男は誰あらう、今では某會社の社長となつた。

金のない青年は餓死するまでに困つた。薄情な世の荒浪になやまされた。ところが、咽喉も通れば熱さ忘るる——で、初對面の客に接すると、何も云はずに、相手の身装を凝視する。靴先からネクタイ、カラーまでも——昔を忘れて成上りタイプをそっくり丸出してゐる。

——かうした人物は——日本の實業界には掃きすてるほどもゐる。そして素封家の坊ちゃん上りが、またその通りだ。

哀れな——日本の社會 金よりほかに偉いものを求めない日本。

何が彼等を???

「今に見ろよ！ 俺が出世した日には、今まで侮辱した奴等に、悉くしつぺい返しをしてやる

んだ。」

弱い者は、踏みつけられる。突き飛ばされる。しかしその弱者もどうかしたはずみで強者に鞍替へするとたいそれた屋敷に頑張る。どこまでも島國的な會長氣分が日本人の固有性である。

コセくした氣持。ゴチく角ばつた氣質で大國民にならうとは、烏が鷲を真似るやうなものだ。

一體、自分を知らず、他人を理解せず、日本の正體をさとりせず、世界を識らず、それでゐて、獨りよがりだから、大國民たるの資格をもたない。

もはや今日の世界關係では、お互に侵略を許さない。よしやらうとしても、それは容易のことではない。もつとも侵略のできる時には、島國政策で、一步も海外に進出もしないし、たゞ島内に封建制を布いて、強い者のお家を守つた。——さうしたちつほけな島國氣質で、大國民を望んでも——それは畫餅だと云ふのほかはない。

「——口には富國強兵だ」これが明治初年のモットーだつた。つまり産めよ殖えよの政策だ。日本はやうに狭まい領土で、貧しい生活をしてゐたんでは、國家が富裕になる方法はない。しかし

いかに領土がせまくとも、せめては人口だけでも増加させよう。貧乏人の子實——それが一國の財源だと考へたのが明治の政策であつた。

領土の擴張は即ち國富だ。どしどし侵襲しよう。強兵によつて富を擷むと云ふのが明治の國策——これが富國強兵である。ところが、ヨーロッパ大戰後は、侵襲ができない。

「軍縮」の標語が、國際時代のモットーとなるに至つた。勿論、アメリカの如きは口に軍縮を唱へてもそれは他國に對する軍備干涉である。誠意のない軍縮だから、各國ともに眉唾で討究する。そのためにいつも公正な一致を見ない。しかしこれとてもやらぬよりはましだから多額の費用を持ち寄つて、軍縮討究をやるのだ。

とにかく侵襲で領土の擴張は容易でない。かうなつて來ると、限られた領土内に、限らない人口を殖やすことは合理をはづれた脱線であることが判つた。

どん底に潜むヒドイ戦術

人口増加によつて誰が儲けた。あり餘つた人間を機械のやうに使ふのが資本家階級である。人口は箱の中にあふれて、出口がない。これが資本家のためには、もつとも便利で——またもつとも危険だ。

あり餘つた人間は食つて行けない。いくら報酬でもよい。食はせて呉れさへすれば働くこと云ふのが、今日のどん底の世相だ。

個性もなにも問題ではない。生きることが至難だ。自分の天分を擲つてたゞ食ふために生きてゐる。

その個性のない機械のやうな人間を使つて幾割と云ふ無茶な配當をするのが日本のブルジョア階級である。そこに幾多の罪惡が隠されて不正な成金が擡頭して來る。

無産者は、たゞ意氣地なく働いてゐる——これがいつまでつゞくか問題である。ストライキが起ると、一方の失業者が職に就くと云ふのが日本の現状である。

東京市電の従業員が、自己擁護の組合の威力で一週間に亘るストライキを行つた。勿論そのストライキそのものには市民の同情がなかつた。新聞輿論の味方もなかつた。しかし一般労働者は

自己擁護の爲に味方した。

東京市そのものは營利會社ではない。原則としては市民の自治團である。それが年々二百萬圓の損をしながら電車を動かしてゐる。結局は電車賃を増すか、それとも電車従業員の賞與金を減するか？ 二途一つを選ばなければならぬ。

電車従業員は遂にその犠牲となつた。それでこの不景氣受難を救済しなければならぬことになつた。市役所に働く智能労働者は賞與の二割減で——なんの不平もなく辛棒した。しかし電車従業員一萬人は賞與一割減さへも不服で、理事者との衝突がはじまつてからストライキの運びに至つた。

鐘紡のストライキなど、従業員の膏血を搾つて、多額の収益を貪ほつてゐる會社に對する労働者のストライキには、一般市民も労働者側に同情を表した。しかし市電のストライキは、市民の自治團たる市役所と従業員との闘争であるだけ、市民には直接に間接に影響がある。

ことに足を奪はれた市民の大半はストライキ側に同情をもたない。同情のないストライキは、敗北する場合が多い。ことに交通労働争議の場合はそれである。

ストライキはやつても電車は動いてゐると云ふのが日本のストライキだ。十八年間も外國で生活した私には、初めての見物であつた。外國生活においても「ゼネスト」を見たことはたびたびであつた。外國労働者のストライキは、自他ともに徹底的な自覺がある。ストライキに對して第三者は手をつけないと云ふのが習慣である。

しかし、日本の場合は——さうは行かない。あり餘つた人口で、路傍に失業者のなだれ打つ都會では、一方に休業するものがあれば、一方には職に就く者があると云ふ始末で、人口増加の弊による失業者の市場たる日本でストライキをやることは他の失業者に職を與へることになる。

ことにストライキの首腦者は、ストライキブローカーと云つて、私腹のためには水輪だから、右にでも左にでも、どちら等へでも轉ろけ廻はつてゐる。

ストライキごとにブローカーが金持になり、それで代議士運動費も得られる。平素の生活費も求められると云ふのだ。——日本生活のどん底に潜む戦術は、右傾も左傾も、同じに墮落してゐる。

この現實の日本がはたして、没落せずして濟むであらうか？

強盜征伐の新しい反動

一國が没落に近づく時には、かならず雑多な法律が生れる。日本の如きは世界第一と云はれてゐるほど、やくざな法律だらけだ。眞に世界の法律市場だ。

なんでもかでも法律づくめだ。實際に行はれない法律をつくり、その力でなくては取締れないものと思つてゐる。某無政府主義者の一家はかの地震受難の時某大尉に虐殺された。軍人は國家國體を云々しながら、國法を認めずに私刑を行つた。法律はあつても法律を認めなかつた。そしてその公判そのものも法律の純理論からスタートを切るわけではない。感情と情實とで——あれだけの虐殺行爲を感情によつて簡単に判決した。

日本人の頭には、生命價值、人權の價值などは法律に照してどんなものであるか、さつぱり判つてはゐない。

國家だ國體だ——と云つても、それは法によつて守られてあるのだ。それと同時に他人の生命も

自分の生命も、法によつて守られてゐる。それにもかゝはらずアメリカ人の黒人リンチ——私刑を行つて子供までも惨殺したと云ふ。その兇悪な罪人が十年にも足らぬ刑罪で放免されたり「法」そのものがあまりに不正に取扱はれても國民は當然のこのやうに思つてゐる。

共産黨征伐の法律が生れ、強盜射殺御免の法律が生れた日本では、争鬪殺人はますます激烈となるばかりだ。日本の法律は——法律洪水のために罪惡受難の時が來た。ある強盜の告白では、

「日本は、貧民に恵まれない社會制度だから、どうしても食つて行けない時、自分の生命を一日でもひきすつて行くには、他人の物を奪はなければ生きられない。その時には仕方がない。一歩ちがへば自分の方が殺されるわけだから、先づ先方を殺した上で奪ふほかに途がありません」と。

共産黨の運動にしてもますます深刻化するだらう。ブルジョア階級は枕を高くする暇がなくなるだらう。ことに生活が行きつまつて來ると、誰でも不平をもらすのは當然である。さうなると、眼のあたりに金權の贅澤な生活を見せつけられることが、ますます不平の癌となつて、世を呪ひ、國を咀ふに至るのが自然である。そこに死を怖れないところの共産受難の日が來るだらうとは心あるもの、想像するところだ。

現在の法律市場はかならず社會受難をまき起すだらう。過去においても數百名の共產陰謀者を出した。これからは更に數を増すであらう。社會制度の缺陷は、水の平均する力のやうに壓へきれない自然の作用を働かせるであらう。

皇室人を除けて了つたら

法律を糧にしてゐるものが必ず違法をやる。法網をくゞりぬけるために法律を學ぶ者の多い日本で、法律を知つてゐるものに限つて無茶なことをやる。

日本で頭を擡げるには法網を潜らなかつたら何もできないと云ふのが日本の現實である。私がルーマニア國に滞在してゐたころは、恰度ブラチアノ兄弟がルーマニア内閣を操縦してゐた。それが悉く賄賂の魅力だつた。ルーマニアは賄賂王國であつた。この國の國王を除いては誰でも收賄すると云はれてゐた。

今の日本も恰度ルーマニアの如しだ。皇室人を除けたら悉く收賄者だと云はれる。輕るい意味

味においては、いかなる人も收賄賂者だ。

この點は何人が内閣に座しても止まない。よし無産黨が組閣する時代が來ても、收賄受難は同じことである。

「僕は俯仰天地に恥ぢない。決して罪になる覺えはない。」

と、いかにも傲慢らしい態度で、検事局に收容されて行く所謂——日本の名士なるものは、やがて豫審終結——起訴……

のつびきならぬ證據はあつても、それが司法省の「高等政策」で證據不充足で免訴になるとか無罪になるとか、日本の金權社會は、あまりに高等政策を用ゐる過ぎる。

ロシアが没落したのも、高等政策の亂用から社會正義を毒したのが崩解の端緒だつた。日本の高等社會には眞の正義がない。金と名譽をから得るためには有ゆる不正を行ふ。

それも民衆が眞に覺醒しない間は、曲りなりにも押し通して行かれる。しかし民衆もいつかはほんとうに自覺する時が來るだらう。

日本はローマとなるか？

ローマの勢力は絶頂に達して壊れた。強きをほこつて思ふ存分に我儘をやつた。むしろやり過ぎて亡んだのだ。イギリス人はローマの轡をふまぬやう歴史のながい體驗によつて、やり過ぎないやうに國を守つてゐる。

ドイツは、ローマを夢みて——焦つたのが願きとなつた。ロシアは北方にローマを夢想して、そのためにほろんだ。

日本が極東のローマとなるか？ アメリカの財閥ローマはいつまでつゞくか？ 文明は東から西へ——西へ、ヨーロッパの没落はアメリカで誕生するとか、アメリカの没落は日本の誕生だとか、それにちがひはないが、東から西とか、甲が亡んだら乙が撞頭するとか、そんなことは自然の法則で、珍らしさうに屁理窟をつける價はないだらう。

アメリカが、強いのにまかせて、思ふ存分なことをやれば、ローマの轡を踏むのは自然の原則

である。

しかし日本の問題はどうか？

日本人の弱點は、アメリカ人のそれとよほど、共通のものが多し。

すぐ勝利を誇つて弱い者を屁とも思はぬなど。自分第一で他人のことを思はず、劣敗民族を侮辱する點など、そのほかに相似たところが多い。

鮮人だ！

穢多だ！ 非人！

今になほ水平造動だの、鮮人運動などを侮つて毛蟲のやうに嫌ふ。それは恰度、アメリカ人がジャップ！ 汝等黄色人種よ、鼻べちやのちび！

白人種との平等などを高調するとは、身のほどを知らぬ野郎だ。

ジャップ！ ジャップ！

日本人も弱い者さへ見ればアメリカ人そつくり、横着な態度で、

チャンコロ！ ヨボ！ エッター

さう云つた弱者排撃は、アメリカ人とよく似てゐる、アメリカ人もどうせヤンキー式が崇つて、やり過ぎて没落するのは眼に見え透いてゐる。しかし、アメリカの没落が直ちに日本の誕生だと云へない。

黄金への降伏者

奢り易い日本人だ。

すこしでも景氣がよければすぐにおごり出す。お調子にのる。身のほどを忘れる。他人を愚弄する。獨り天下になる。怖いものがなくなる。見榮を張る。弱い者への慈悲心がなくなる。

大正七八年の景氣はいつまでもつゞくものだと思つて驕慢な氣を起したことは、もとの木阿彌になつた時にはじめて悟つた。

大戦の影響で、船成り、鐵成り、いろ／＼の成上り者ができたが、悉く没落して了つた。スベインがやつぱりそれだつた、日本と同じに戦争成金國となつたが、この國の人間も日本人そつく

りで、前後の考へのないお調子民族だから、きれいさつぱりと財布の底を掃除して了つた。再びめぐり來ない大戦の收入を、惜氣もなく還へして了つたとは、なんと云ふ無智な國民だらう？

金！ 金！ 金に降伏されながら、すこしでも景氣がよければ、

「しみつたれるなッ！」

と、さも氣前よく、ばら／＼と使つて、

「俺は金を征伏するんだ。金の番人ではない。」

いかにも——きれいだと云ふ風に氣取つてゐるが一朝不景氣に出逢ふと、……黄金への……絶對降伏者である。歴史は——金權降伏者が、やがて没落することを語つてゐる。

没落の日本に踊るモガ、モボ

モボ、モガはなぜ生れたか？

それには資本主義文化の影響もある。そして、それから起る西洋風の建物にも関係がある。すでにアメリカに征服されて了つた洋式生活には、どうしてもモボ、モガの生れ出るのは、経済的に、そして、因習への反動として、止むを得ない発生である。そして、ハリイウツドのフィルムの影響も多大にうけてゐるであらう。——モガ、モボの進出は地震後——殊にはけしなくなつたさうである。私は昨年歸朝して、モガ、モボのえたいの知れない姿態を見た時、今まで歐米の純西洋風を見て来た眼には、

「まあ、なんと云ふ淺ましい姿だらう」と憤慨したのであつたが、此頃では別に怪物だとは思はなくなつた。銀座を歩くと南洋の都市でも旅行してゐるやうな當時の氣持もすつかり消えて夫つた。それは見馴れた爲であらう。それと同時に、モガ、モボの美はしさが多少とも判つて来た。もう——私の頭は日本にかぶれたかもしれないが、モガ、モボの生れるのは自然の行方であることを知つた。

日本風の家屋が日に月に亡んで西洋化すにつれ、今まで珍品であつたモガ、モボもいつの間にか、ありふれたものになるだらう。そして、時代が——もつともつと、先きに進むと、今度は日

本風の家屋や、日本キノの人が珍品になるかもしれない。とにかく、モボ、モガの發生と西洋建物の増加は、日本が日に月に没落してゐることの表現である。たゞそれのみではない都會に現はれる文化的設備、——文化的産業などは、全然西洋への降伏である。

秀才は木乃伊に

日本では適材を適所に云ふことは駄目だ。その人の天分も實力も用ゐることの六かしい社會だ。この不條理な社會がそれ等の人材を生埋めて、驥足を縛ることが、やがて日本を没落に導くことである。

昭和の今日においても、なほ東洋風の事大思想が、「上」から命ずることではなくてはまとまりがつかない。これが日本における一切の仕事である。

ことに役所——會社などのテーブル一切の仕事は「上」から……にらみの利く人の口がから

ないと、いつまで経つても解決はつかない。——この事大思想の持主が、世界的大國民を希望することは、木によつて魚を求むるの類である。

なんでもかでもエライ人のにらみがなくては——それに權威がないと云ふ日本は、没落のほかに——行くべき途はないのだ。

そのエライと云ふ人間の——その正體はなんだ！ それ等は悉くエゴイストの成功者ではないか？

他人の利益を奪ひ、法網をくゞり、人を泣かせ、世を瞞着した權威者ではないか。これがいつまでもつゞくと云ふことは断じて無い。

しつぺい返しへの反動

「オィー！ 誰に道を訊くんだえ、洋服の髯面がなんだ！」

ちよつと道を訊くにも、印絛纏の労働者から、嫌なことは聞く時代になつた。彼等は労働者

の權利を教へてもらつた。しかしほんとうの權利價をしらない。權利とは横着な態度で——自分より上の者に逆襲することだ——と考へてゐる。

「今までおい等を壓迫したんだぞ。おいらにも權利があるんだ——コン畜生——」
と云つた風の氣持は、無茶な壓迫に對する無智な反動だと云つてよい。

權利とは——横着、横柄、逆襲的なものだと思つてゐるものが多い。一體、狂人にピストルをもたせるやうな權利を誰が教へたのであるか？

國民教育を誤つたことは、誰の責任に歸すのか？ 不公正な社會を組織させ、それによつて金權階級だけが、枕を高くした。そのためにせつ角の權利を、逆襲的反抗性のものだと觀念させるに至つた。即ちその權利の誤解から起る無智な動作は、——今までのブルジョア階級が、あまりに權利の獨占をやつたからである。だからその反動が無智な横着となつて、世を傷ひ、人を害するのだ。その呪はしい手本を見せつけられた無智な輩は、多年の壓迫から甦つて、そこにしつぺい返しのためで反抗するのだ。

日本没落の掲示板を見よ

國家は法律的に認められたことばだ。自分の犯罪だつて、法律の處罰さへうけねば天下晴れてだ——と、自他ともに——さう思ふのが、日本の現實である。

今日の日本の社會には驚くべき犯罪が隠れてゐる。——それがあばかれないまでのことだ。だからそこにユスリ業が繁榮する。

日本の營利會社の首脳と役人くらゐ、隠れた犯罪をもつものは他の世界では見られない。——それ等が自からを護るためには警察の力でなくては——どうすることもできない。だから警察力によつて、ユスリ業者を排撃しようとしてゐる。

どこの會社にも——その受附の横手には、必ず「赤紙の警告文」が張つてある。面會を強要する者があれば直ちに警察へ申出でよ——との意味が書かれてある。

他の世界では——とても見られない警告である。それが帝都の真中で、しかも世界三大強國の

一ツだと云ふ日本で、更に世界における四大都の一ツだといふ東京において、——なんと云ふ滑稽か？ 矛盾か？

彼等の化けの皮！

罪惡の巢窟を固めて、有ゆる惡事をはたらくブルジョア階級と、それをユスツて食はうとする左翼と右翼運動者とは、善良な國民のためには、全く呪はしい存在である。

法律で無罪の判決をうけると、やれ雪辱の宴だ！ 一體なにが雪冤だ？ 民族道德の腐敗も今日

の如くはなほだしいものはあるまい。しかも一國の治政を左右する内務大臣なるものは、全く源平戦の勝てば官軍の主義である。——これを鈴木と安達について見ると、一方は腕の喜三郎で、一方は小刀の安達だ。

この二人とも勝ちさへすればよい。勝つことが政治だ！ さう思つて善良な國民を傷めた。勝たんがための戦術——この二人が、議會において答辯することばは、互に似たりよつたりの

ものだつた。

鈴木のときにも、安達の時にも、互に誠意の押賣りだ。正義を食ひものにして源平戦をやるのだ。

それに對して國民の審判が、極めて正確であるならば、なんで日本の没落を見よう。——しかるに國民の大半は、冷静な批判をもたない。——そこに日本没落の端があるのだ。とにかく云ひたいことの云へない。眞實の告白のできない。たゞ上手にゴマ化すところに腕前がある。それが所謂——敏腕家であるに至つては驚くほかはない。

役人根性の役割

役人の服を着ると、官僚気分になり、役所の門をくゞると、なんだか融通の利かない角ばつた氣持になる——と云ふのが役人根性の告白である。

日本の役人には公僕であることの觀念がない。國民を見ることは——即ち敵を見るやうな氣持

になるさうである。日本の環境はどこまで官僚性に支配されるのか？

この氣持は、上は大臣から下は巡査に至るまで官僚氣質はどんなにしても除けない。

「オイ待て！」

と、不審訊問をやる。それもいい、人權の價を知つてさへるるなら——ところが、巡査隊ぎをやるものに限つて、自分の人權を低下させてるから、すべての人間の人權を、極めて安つほいものだと見積つてゐる。

「逃げるのか？ 承知しないぞ！」

ムチャクチャに蹴る毆る。役人の威光でさんぐな目にあはせる。そして官吏侮辱だ！ 公務執行妨害だと怒鳴つて人權蹂躪をやる。

いい巡査もあるが、中には言語道斷な輩がある。——しかしひとり巡査のみではない。多くの役人が権力本位で育つてゐる。

一體ヤマト民族だ——八千萬同胞だなどと、誠意と情義を押賣るものに眞の同胞觀念があるだらうか？ どこに博愛的な人間味があるのか？ 坊主も牧師も、すべてが墮落である。大衆も役

人の眼を盗んで勝手なことをやる。

人権のない、正義のない、自由のない、人道のない社会は没落するのが當然であらう。

なるほど西洋ビルディングが景氣よく建つて行くから日本は大繁昌に向つてゐると云ふものもあらうが——それが即ち没落の端ではないか？

誠意も浪花節化する

日本のすべてのものは歐化的に改造されて行く。しかし社会的良心だけは、改造されない。ことごとくに誠意らしく見せ、その實こそつと不正をやるものの勝利だ。

議會の演説だつて、誠意らしくやつてゐればよい。しやべる方でも芝居のつもりだし、聞き手の方でも浪花節を聞くつもりだから。

講演でも、演説でも、説教でも、まるでラジオを聴くつもりだ。聲のいい人を讚美する。朗々といい聲をはり上げるところにチャーム力があるのだ。

すべての人間が眞面目と誠意を缺いて了つた。技巧的表现——これが現代性の一つとなるに至つた。——人間の良心は全く没却されて了つた。

スピード・ヒロ・ヒロ

スピードだ、テンポのはやいものを——昭和性が求めるものは、トーキー、テレビジョン、次から次へと新しいものでなくてはならない。そしてすべての人は變態的に動いてゐる。

政治に、文藝に、美術に、そして映畫——それ等がことごとく世界的に變態化したのである。高速度のテンポを要求してモダニズムに向つて駆つてゐる。勿論、股線もある。轉覆もある。反動もある。しかし、行先はことごとくエロティックな終點へいそいでゐる。

いかなる人間にも性的本能は餘儀ないものであつて漁色生活は、現代相の眼目である。即ち眼にふれるもの、耳に入るもの、ことごとくがエロティックな表現である。

要するにエロティックは人間の終點である。いづれの國もこれに向つて高速度で走つてゐる。

ローマの亡んだのもそれだ。スペインの亡んだのもそれだ。そして近代的にはフランスが魁だ。イギリスも、アメリカも、ドイツも、イタリーも、エロティックな墓場へといそいでゐることは事實だ。

ロシアがそれであつた。ロシアに近い日本には——最近さかんにエロティックな色彩がみなぎつた。

歴史を追ふと、支那も、ベルシヤも、印度も、エチプトも、シリヤ、バビロン、ギリシヤ、ここごとくエロティックな花火線香で古い歴史を結んだ。

日本にも元祿のエロティックがあつた。これからは昭和のエロティックだ。どこまで行くか？それが問題だ。

天皇と無産者

—

日本人は天皇の赤子。

天皇は日本萬民の國父。

父子互に親しみ平和な一族を表象するところに眞の幸福がある、と云つてゐる。

しかし、天皇は、大衆赤子の貧困な生活を実際に、また親しくお知りになる暇がないやうである。天皇は、雲上にお在しますことが昔からの習慣である。

赤子なる大衆の方では、御親父たる天皇の御生活についてはすこしも知ることができない。

どんな風に毎日——御生活遊ばされてゐるか？

赤子大衆の方では、いろいろ憶測するばかりで、眞相を知るよしもない。その想像にして當つてゐれば幸ひであるが、もしも當つてゐないとすれば失禮になるばかりだ。いづれにしても知らないで想像するほかには何の方法もないわけである。

四海平等とか、一君萬民とか、それは日本の精華であるならば親は子供の生活を識り、子は慈父の御生活を識ることも、愛情の握手であり接近である。そこに理解ある親睦は築かれるであらう。

しかるに國父と赤子との中間に挟まる無駄な人間のために、いつも二ツの間が隔離されるやうな気がする。禍ひ多い中間人のために慈父と赤子との間には純真な愛情がうすらぎつつあるのはまことに嘆かましいことである。そして親と子の間に横つてゐる溝は、日に日に深くなるばかりである。

國父が赤子たる貧民のドン底生活を理解されることは、赤子に對する義務である。赤子が國父の御生活を知ることが、親しみの素である。しかしそれが中間の人によつて、常に禍ひされて、國父の平民化を見ることができない。

二

日本人は外國人を理解せず、外國人もまた日本人を知らない。お互に知らぬ同志が親しみたいと望んでも、それは理想であつて實際ではない。

イギリス、フランス、ドイツと云へば最高級文化としての強國ではあるが、ホテルに泊つた時汽車で旅する時などに、よく私に訊く者がある。

「日本生活の現實は！ どんなですか？ 日本にも汽車や電車がありますか？」

全くなさない話だ。何を寝ほけるんだと頬ベタの二ツも張り飛ばしてやりたい気がする。また異國人と互に食卓を取りかこんでゐる時など日本を理解しない話を聞くと、目の前で皿でも搦んで打ち砕いてやりたい気がする。これも眞のアンダースタンディングがないからである。赤子と國父との間に、ほんとうの了解と親睦がなく、いつも不安な生活をつづけ、生活思想の混亂してやまない状態にある國は、どつかに禍根が潜んでゐるからである。

知らないことは人を害し世を毒する。そして不知の原因は研究しないから起るのである。ヨーロッパ諸邦の各小學教科書には、日本の門戸が解放された維新時代の日本がその儘に書かれてゐる。

神秘的日本。謎の日本。化物の日本。迷信の日本。サムライの日本。ハラキリの日本。とにかく海洋の秘藏國と名づけられてゐた。それで、當時の日本を好奇的にのみ紹介した姿が、今も尙ほ小學教科書に挿入されてゐるから汽車電車などはあらうはずもない。ことにヨーロッパ人の眼に驚異を感じた、人力車、雲助、飛脚、吉原、オイランなどの深い印象が、日本の表現であるかの如く考へ、すこしも新日本の姿を知らない。

「維新の日本と今の日本とは大變なちがひですよ。なぜ改訂しないのですか？」
と或小學校長に訊くと、

「今の日本はヨーロッパの模倣ださうです。して見れば、日本の姿を見るには、日本固有の色彩を語つてゐる歌麿、豊國などの版畫によつて日本趣味の風土情景を聯想するのが自然でせう」と、日本人は舊日本を恥かしく思つて新日本をお自慢しようとしてゐる。しかし歐米人の方では、新日本の装は、すべてが歐風だから眼ざはりである。が、舊日本の姿はヨーロッパ人にとつては全く好奇的だと云ふ、二ツの見方と考へ方とは、全くはき違つてゐるのだ。

國父と赤子との間も、見方において、考へ方について、どちらもはき違へがあつてはならない。ことに畏敬することのみでなく、親しい愛の結晶でありたい。眞に親しい親子でありたい。しかし國父と赤子との中間にいろいろの邪魔者が、利己的榮華を食ほらうとしてゐるので、そのために國民たる赤子は、どんなに禍ひされてゐることであらう。

曲線美のモダン戦

パリモデル、パリマネキンガールを見た眼で日本のモデル女、マネキンガールを批評するのは、いさゝか野暮かもしれない。

何處に女の美があるのか？

美術のモデルでも醜のモデルだ。

裸體の日本女を見て美術的な美を見出してみる——と云はれてもそれは容易なことでない。

私は二十幾名かの日本女のモデルについて美を探した。しかし、とうとうそれは絶望であつた。

背や腰の肉線は全くの變態だ。その肌は色彩美のないこと、痩せ女の貧弱な姿と、デブく女の

醜は、一目でうんざりさせられる。

無表情で、無細工で、笑ふのか、泣いてゐるのか、詰らなさうな顔で、時間さへたてばお金になるのだといった調子だ。

肌の色にも、骨格にも、筋肉にも、生々しい情味が見えない。さながら蒙古女を見るやうに、張り合ひのない氣持が漲る。

X

私が祖國を去らうとするその前年、森律子さんの女優學校入學問題で天下はだいぶん騒いだことがあつた。

今度歸國して見ると、女優と名のつく女は數百名を過してゐる。ことに此頃名家の娘さんがキネマ女優を志願することはキネマの黄金時代を語るものである。

それにつけて、流行時代——化粧時代がやつて來た。若い女は、生れ變つたやうに歐化的化粧に身をやつすことを名譽としてゐる。しかし、化粧法はどんな風に變つても女の形には變りはないのだ。

幾分か足長になり、骨格はしつかりして來たが、私共の云ふ、眞の美人は裸體的自然美を指すのだ。

この夏、海水浴場で、松竹や日活の女優が裸體で遊んでゐるのを見た。

衣裳を纏つてゐればこそ美人だが、世間で騒がれてゐる女優の肉線も、外國女のそれに比べては全く見劣りがする。ことにフランスのドービル海水浴場や、ビヤリツ、ニースあたりで見るヨーロッパ女の肉線美に比べると全くなさない氣がする。

女の安つほい宿命

前途に輝いてゐる希望もなく。

安月給で苦しくあへいでゐる女。

一枚の錦紗を着ることさへも容易のことではない。

安月給で——あたり一生をゴミにして終ることが、あながち職業婦人の宿命でもあるまい。然らば希望とは何か？

「つまるるところは結婚。」

これが職業婦人の希望であらう。しかし結婚そのものは煩はしい因習を残して、平等的な門戸

を開けない。

朝は人よりも先に起き、さて電車に割り込むことから必死の仕事だ。繊弱な女の身で、電車受難を切りぬけながら無遅刻精進をするのは容易の事ではない。僅かに命の洗濯をしようと云へば——それは日曜日それだけであらう。そして悩みながら毎日々々同じことを繰返してゐる自身身を、ちつと顧みる時には淋しい人生観が、どこからとなく襲つて来るであらう。

私は日本の職業婦人と西洋の職女とを比べ、日本の女があまりにも惱ましい生活を送つてゐることを氣の毒に思はずにはゐられない。希望の薄い職業婦人の勞作——前途の淋しさ。

しかし職業婦人増加のために、青年の職業は女性に奪はれて、茲に若い男女の職業争奪戦は起つて来た。人口の激増と生活苦のためにこの二ツは次第に競争化すであらう。そして結婚難もますます呪はしくなることであらう。

日本商人の世界的没落

弗の假段は高い。

觀光外人が續々と来る。

日本の二圓は一弗の價。だから米國人に物を賣る時は、倍額に賣つてもよからう——これが日本商人の腹底にある掛引である。

「この商品は輸出向だから高く賣りたい。」

これが日本商人の心持である。

「日本商人は不正直で信用ができない。」

これが外國商人の言ひ分である。

日本の小商人とかかり合つたら、きつとひどい目にあはされると云ふのが外國商人の恐怖である。だから外國商館の手を経ないでは貿易ができないと云ふ破目に陥つてゐる。日本商人は貿易的には歴史的敗北者であつて、三井三菱の如き大貿易業者が、資本と政府の力で貿易を獨占して私財を集めることになる。

大貿易家の壓迫は勿論小貿易家を惱ませて延びる餘地のないことも事實であるが、一ツは歴史

的に日本商人の不信用のために小貿易家の没落を見るに至つたのである。

世界でカンニング商人と云ふのが、

「ギリシヤ商人、イタリー商人、ルーマニア商人、アルメニア商人、支那商人、ユダヤ商人、日本商人」

この七人種は貿易商人として寸刻も油断ができないと罵られてゐる。

無職者の一萬圓自動車

日本は無職者の食へる國。

暴力團の羽振りの好い國。

役にもたぬ××會の看板をデカくと掲げて飯の種にする國。

柔道が強いぞ。

剣道が達者だぞ。

南京角力そつくりの圖體を自慢に、それを米糧にする國。
會社の重役は泥棒的にゴマ化し、法律をくぐつて金を儲ける。その弱身を狙ふ暴力團は暴れる。

暴力壯士の力をかりて政治的權力を維持することのできる國。

右傾標榜の國粹暴力團も、左傾標榜の主義者も、二ツながら金持を餌に、無職者の榮える國は

日本だ。

政治屋の中に無職者の多いこと、無職を自慢して國士だと云ふ日本の高等遊民。

日本の教育と因習は、羽織ゴロの遊民を製造するばかりだ。

無職者が大邸宅に住みこんで多くの壯士を養ひ、一萬圓の自動車に乗つて、ブー／＼飛んでゐる姿は、——日本と云ふ國の不合理を證明してゐる。

不當なポーナスの墮落

どんな會社でもよい、會社さへ創立してゐれば食へる國。
親が重役だから息子も重役になる。
會社も世襲的重役を誇りとしてゐる。

イギリスの諸會社も重役の世襲を誇つてゐる。アメリカでは重役の世襲を排撃してゐる。
重役世襲國と實力本位の重役國とは、商工的進出の上に、どれだけの差が生じることであらうか？

日本人の因習的勢力は會社員のみではない。官吏の社會にも、そして政治家の社會にも親の光りで子供の榮えてゐることは、幾多の實例がある。

何々會總裁の息子だ。
何々博士の息子だ。

まあ、親の面目を立ててやらう。

それが日本人の群集心理の一部だ、公正で、明るい平等自由は、とても望むだけが野暮である。愚かな大衆は、いつまでも愚をくり返すのである。眞になさけない社會ではないか？

かうした氣持は、常に日本の社會進化を害して、一會社の重役が膨大なボーナスをむさぼることとを名譽の如く思つてゐる。そして自己的利益にのみ迷つてゐる。

こんな社會が——何時までこの不合理をつづけて行くのか？
勞働者から搾取する重役の富はボーナスの墮落——帳簿のゴマ化し——背任横領によつて大邸宅の庭園に肥料を積んでゐるのが日本の紳商である。

日本の新しい誕生？

日本の歴史は強者が弱者を倒して生んだのである。

そして強者が殞落してから弱者が強者に代つたのである。

その歴史は——弱者を助けて強者を挫くと云ふのが日本のモットーであつた。しかし事實は弱者を踏みつけ弱肉強食の戦術である。

日本の社會制度は、すべてが強者のために組織されたものであるから、猫も杓子も強者を的に

進出しようとしてとめる。

今まで踏みにじられた者が、急に頭を擡げると、すぐに横柄な成上り者となつて弱者を見下ける。世界を家とした私の體驗から見ると日本の成上り者は、特殊の虚榮を張つて權威振らうとする。そして昔ながらの強者は、傳統的に弱者を愚弄する癖がのかない。

悪人でなくては頭の上からないのが日本の社會である。私は——未だ曾て善人の成功者を見ない。一代で成り上つた者は、きつと悪性の人物である。

日本人は善を亡ぼして惡に墜つた。弱者を助けると云ふ義侠的モットーの日本は、殞落の殘骸を曝らして、惡に生きる處世的社會戰が新しい誕生となるに至つた。

公認スパイ戰とお札博士

日本生活の裏面は、悉く陷穽戰である。或意味のスパイ戰略である。そこに惱ましい現實を生んでゐる。

內的にもさうであるが國際的に見ると、アメリカ大使、イギリス大使、ロシア大使などその他の大公使は、公認されたスパイである。日本の秘密は、それ等の免許スパイによつて本國に向けどしどし秘密の通信を飛ばされてゐる。そして日本の方でもお互にやつてゐることではあらうがアメリカ大使などは親善を装つて、その實、眞に皮肉なスパイ戰をやつてゐる。アメリカの老博士で、親日お札博士と云ふのがある。學者の名前をかりて親日博愛の假面をかぶつて、ひそかに日本の軍事的スパイとなつてゐるお札博士がある。日本商人は、うまくくと外國商人を騙ますが、そのしつぺい返へしに、親日お札によつて、すつかり裏切られてゐる。——油斷のできないのは親日お札である。このお札戰術は、日本の生活戰に利用され、優勝劣敗を語つてゐる。

運賦天賦の世相

智慧があつても、

奇才があつても、

経験があつても、

腕力があつても、

金があつても、心ず成功するとは請合へない。

合理的に實力本位で勝利を得るとはきまらない。これが日本に於ける不合理生活の現實である。

サラリーマンも、

獨立事業者も、

學生の入学も、

卒業生の就職も、

女も子供も、すべての生活が、運賦天賦だ。合理性のない日本生活では「運」で運命を決するのだ。生れ落ちたその時から運勢によつて支配されるのが日本の生活である。

日本の現實は——全くそれだ。立派に手腕のある人でも没落する。薄野呂だと思ふ人が、とんでもない成功をしてゐる。日本では十年を——と昔と云つてゐる。十年の歳月を経ると、同じ釜の

飯を食ひ、同じベッドに寝た友が、社會的に別天地を描いて、近寄るのも氣恥かしいほど、地位をちがへてゐる。

成功とは何だ？ 成功の標準とは何だ？ さう争へば別だが、とにかくお互の生活標準が變つて来る。

それが外國生活とはちがつて運賦天賦——十年——と昔の運命はかなりけばくしいもので、

すこしも油断のできない生活である。

誰もかも、たゞチャンスのみを狙ふ、そして仕事振りは極めて不眞面目だ。つねに圖々しいこ

とを考へ、勞作をすくなくしてチャンス等待つ。

日本でチャンスを掴まない人は、全くアウトラインの線外に生きて行かねばならぬ。そこに惨

じめな日本生活は繰返されるのである。全く呪はしい社會である。

別嬪のお尻の下

我勝に電車を目掛けて、

他人を突き飛ばして電車に、

じつと、電車世相を見てみると、日本の社會の混沌たる不公正が、あり／＼と眼に入るやうに思はれる。

日本を旅して、神戸の市電ほど、氣持のいい電車はない、さすがに國際市としての神戸人は他の市民よりは、この點がよほどに進んでゐる。ところが日本の帝都である東京の市電は大阪の六電車にさへも及ばない。

この頃の東京の市電の中には、西洋婦人の數が急に増えたやうな氣がする。しかし釣革にぶら下つてゐる西洋婦人に席を譲る者はすくない。

大學帽を被ぶる學生が割合に圖々しく構へて、中等學生の方が紳士的に席を譲つてゐる。口は生活弱者として人權を叫ぶ者に限つて、電車内の公益を害する。殊に婦人などの弱い者に對しては一向に席を譲らぬ。たま／＼譲るのは子供づれの女とか老人くらのものだ。

釣革にぶら下つた若い女に對して、若い男が——席でも譲らうものなら、女も男も互に顔を赤

らめ、いかにも悪いことでもしたつもりでゐる。しかし婦人達の中には、席を譲られても、

「この人は次の停留場に降るんだなあ」くらゐに合點して別に感謝もしない。

「あたり前だ。」

と云つた風の横柄な態度をしぼ／＼見受ける。男の方でも——たいして感謝もしない女に、折角坐つてゐる席まで——譲つてやる義利もないと云ふのが、言ひ分ではなからうか？

女の方でも明るい表情で愛嬌のいい感謝をすれば——男の方でも、それに報いるであらうに。

兎に角、電車世相は眞に不愉快な現實である。あそこに氣の毒さうな婦人がゐるから席を譲つ

てやらうと、立つて行つて、

「おかけなさい。」

と云へばつまらぬ遠慮をしてもぢ／＼してゐるまに、その空席は他に奪はれてゐる。譲つてやつた女は掛けないで他の勞働者が掛けるなど、かなり圖々しい人間の寄合である。

一人で二人前も占領し、中には下駄をぬいで座敷並に坐つて二人前を占領する者もある。一ツの空席を目掛けて、あさましい争ひをするなど、どこまでも社會生活の公正を破つてゐる。

魔の借家に住む私

一

どこかに——氣持のいい高等下宿はなからうかと、昔住んだことのある帝大前から弓町にかけて安住の場所を探した。幸ひに縁りに包まれた高等下宿が見つかった。

「部屋はあいてるませんか？」

「あいてるますが、あなたのお勤先はどちらですか？」

部屋を借るのに——お勤先となんの關係があらう。外國生活を打切つて、日本生活に入らうとする私は、その神經的な言葉を聞くとむか／＼と癩に觸つた。お勤先によつて貸しもしよう——と云ふのが先方の態度だ。

私は日本の特種生活に馴れなかつたので、餘計なおせつかい者め——と腹だたしく門を出た。そして不快な氣持でぶらついてゐると、また下宿の看板を見つけた。

高臺の眺望のよいのに惚れこんで、

「部屋がありますか？」

「え。」

と答へたが、彼の眼は私の靴先から帽子の尖にまで、ギョロ／＼と凄い眼を働かせる。そして一向に要領を得ない。

妙な奴だ！ 古着屋か質屋のやうにキモノばかりに注意する。私は全く氣を腐らせて了つて、

ふいと、立關を出た。

次の日は、洋服をぬいで羽織袴に改めた。そして方面を變へて探した。と日あたりのいい、綺麗な下宿を見つけた。日本では、人物評價の第一歩が身装によると云つてゐる。人間に向つて挨拶をしたり、お辭儀をしたりするのでなく、衣裳に對して挨拶するのだ。

もし身装が貧しかつたら、それこそ鼻つまみにされるのだ。物的本願の日本人は、人間の内的價值よりも外觀美に重きを置くと云ふのが、日頃の習慣である。その日の私は日本キモノを着流してゐた。

「部屋がほしいのです。」

「え、あります。」

「どんな部屋が——」

「見晴しのいい部屋がありますが、長くおとまりですか？」

「さあ——二三ヶ月の積りですね。」

「私の方には保証人を立て、頂きたいのです。でないと前金で頂戴することになつてゐます。」

長い海外生活に比べて、いかに世智辛いことであるか、私はしみじみ日本生活を呪ひたくなつた。外国では、保証人だ。前金だ。とうるさいことを云ふものには一人だつて、出會はなかつた。ましてお勤先はどちらですか？ などと餘計なおせつかいは聞きたくも聞かれなかつた。

二

私は遂に三度び——因業な奴に出遇つた。勿論私そのものに信用がないからではあるが、巧利主義本願のイギリスを旅行する時など、私は異國人であるから、最も信用が無いわけであるのに——そんな心配は一度もなかつた。

ホテルも不経済だから借家でもしようと思つてゐるうちに、友人の世話で大塚に假家を見つけた。その時の私には女房もない、むろん子供のあらうはずもない。

とにかく部屋が三つで三十四圓、そして敷金四つと云ふ借家だ。その時は安いのか？ 高いのか？ 日本に馴れてゐない私には、見當がつかなかつたが、それはべら棒に高い家賃だと知つた。この家でも嫌な問答を聞かされた。

先づ第一が勤先の問題だつた。外国から歸つてやつと腰をおろしたばかりで、まだ勤先はきまつてゐない。サラリーマンになるかならぬか——その邊のことはきまらうはずもない。

感の悪いおせつかい後家婆であつたが、私はその友人の近くにいる方が便利だと思つて、そこに決めることにしたがお勤先と云ふことがその婆のためにはよほどの問題であつた様子だ。しかし友人の保証でやつと決つた。

税関から取りだした澤山の荷物を、その小家に運んだ。そしてたつた一人でコツ／＼と荷物を整理してゐると、

「御免なさい。」

と云ふ聲、まだ誰も知らないはずなのに、珍客が女關に立つた。

「稻荷明神のお寄附をお願ひ致します。」

世智辛いモグリ戦術の第一戦に出遇つた。

「へー、米屋でございます。へいどうぞ……」

「手前は酒屋でございます。醤油も炭もお安く致しますへー。」

「野菜はいかゞさま。」

「魚屋でございます。」

生活の必需品が、へーへーと腰を低くして私の門に迫る。

三

所謂、御用き、商人が封建的に頭を下けることも、人口増加の同業者競争の弊が、やむなく――さうさせるのであらう。それがまた世帯持の細君達の見榮坊に適ふわけであらうか？

西洋女の頭が、いかに細かくエコノミツクに働くかを考へたならば、日本女は恥ぢ入らなければなるまい。

勿論上流流女は、怠惰の表現であるから論外であるが、中産以下の西洋婦人は、野菜網と、バスケツトを手にして市場に出かけるのが午前中の細君の日課である。

日本婦人は西洋婦人の女權にあやかりたいと願つても、西洋婦人の市場詣でにあやかりたいとは願はない。

借家住ひ第三日目のことである。

ちよつと外出した間に――履物を盗まれてゐた。これが日本における「コソ泥受難の第一目」である。そして空巢狙ひの巧妙な腕前を知つたのであつた。

借家第四日目には、強賣りが来た。

六日目には乞食が来た。

七日目には獅子舞が来た。夕方は猿廻はしも来た。

八日目に慶兵院の老兵さんが来た。

十日目に紋付の壯士が来た。お羽織ゴロの云ひ分を拜聴した。

十二日目に××新聞の記者が来た。

いづれにしても煩はしい社會だ。複雑な世相だ、畢竟——貧困の世相が、いろ／＼な場面を作つてゐるのだ。

圖々しい彼等の行動、やくざな振舞ひ、一體それは——誰の責任であらうか、その原因を恨めしく思つた。

どう見ても、日本生活は悉く弱い者いぢめである。彼奴等は社會から虐められた者であるが、それがまた借家人の弱い婦女子を虐め廻はすのである。

日本ほど、弱肉強食のはけしいところは他にはあるまい。日本の運勢は、前途に亡兆の現はれてゐることも、日本生活があまりにも不均等であり、弱肉強食であるからである。

辻に迷ふ花嫁

日本の家庭にはいつもごたくがたえない。そして惱ましい悲劇がつきまといつてゐる。家庭の構成が不自由で不公正にできてゐるから紛擾が絶えないわけだ。その家庭は——結婚が

第一歩となつて生れる。だから結婚は人生の一大事件である。しかし日本では案外に手軽く、そして他動的に扱はれてゐる。ことに媒介者の口によつて大體に決まるのである。結婚式は型のやうに運ばれても、嫁の籍はそのままの人が多し。つまり内縁の妻として公認されるのだ。

嫁は結婚するまでにどんな心持でゐたのか？

男は今までどんな風の内幕をもつてゐたか？

男女の實際的眞相は、夫婦となつて一緒に世帯をもつてはじめて知るのが日本式習慣である。

新婚の日も、二三ヶ月は夢で暮すが眞の愛情は、どうしても出て來ない。夫婦性がびつたりと合はないことを發見することもある。趣味、性行、因習などの相異から破鏡を見ることは珍らしくないのだ。殊に下層社會では、くつついたり離れたり、それを長屋結婚と云つてゐる。

私は歸朝後、いろ／＼の家庭を見た。第一、西洋人夫婦の相愛の氣持を直ちに日本の夫婦に求めると困難だ。

「夫婦のことなどは他人なんぞに分るものか。」と云つて了へば、それまでだが、實際に愛情がなくとも一緒にゐるものが多い。それも習性

だとあきらめてるれば別に不思議はないかもしれぬが、熱愛的な夫婦愛を知らぬのも淋しい。つまりこの荒びはてた日本式の社会は、不合理で、情熱のない夫婦愛によつて造られたホームである。

日本のホーム戦線はかなり複雑なものである。それが社会をして更に複雑化するのである。

青年の横顔

昭和の若々しい青年處女に向つて昔を教へようとしても、第二の國民である彼等は、直ちにうけ入れるはずはない、青年處女は新時代の産物であつて、舊時代の産物ではない。百年後の世界にどんな社会が出現して来るか。老人がいくら地團太ふんでも百年先は分らうはずがない。だから無暗に心配したつて心配の代償は何一物も得られない。老人は亡ぶ。若い者には未来がある。

x

日本人の頭には、自分の國の小さいことが分つてゐない。島國であることも忘れてゐる。日本が世界のはてで、田舎だといふことさへもはつきりとは知らない。狭い國で共喰ひながら世界の強國だと思つてゐるやうである。日本といふ國をはつきりと意識しないことはお互の損失である。

賣名婦人の天分

田舎町の宿屋住ひもいいが、お茶代の多募で待遇に變化がある。現金主義の現實暴露を直覺的に見せられると、全く淺ましい氣がする。しかしこゝが修養のしどころ——彼奴等も我が身の可愛いさだ。商賣柄——やむを得ないことだ。人情は異なるもので、氣心を知り合ふと、何の事はない家族同様の氣持にもなる。

耳隠しの田舎モガの女中が甲斐々々しく働いて雨戸を閉めようとしたが、あひにく敷居に乗つかつて雨戸は前へも後へも動かぬ。かよい女があるツたけの力で押したり引張つたり、泣き

さうな顔をして遂に階下の三助君に助けを求めた。

三助君が兩戸をひねるとスラ／＼と閉まつた。男女の力量の相違が男女同權を皮肉る。勿論、同權は合理だ。だが、自然は男女兩性を別けてゐる。

女は男の眞似をしなくてもよい。しかし射的の稽古、武術のたしなみなどは女ながらも心得てゐてよからう。だが、日本の大和撫子がヤンキー・ガールを眞似ることはどうか？ 女は女の天分を守つて男は男の天分に従ふのが自然ではないか？

賣名女が突飛な宣傳をやつても、女は女として進むべき所に行けば——それでいいのだ。

モガの秘密ホテル

江の島から見ると富士の姿……ほんとうに素的だ。

晴天の富士、淡墨の富士、いつ見ても非のうちどころがない。富士は全く自然に恵まれた國寶である。

辨天の孤島……繪の島は、今も昔に變らず翠綠を海に映してゐる。稚兒狩りの岩本院の跡もある。辨天堂も岩窟もある。

夜半に浮び出たから夜の島と呼ばれ、風光が繪のやうに美しいので繪の島となり、すつて下落して江の島となつた。

義經の昔を偲ぶ腰越の名残の跡から鎌倉行き電車に乗つたが満員だ。苦しい立往生のまま釣革にブラ下つた。十二三丁の長さを七里ヶ濱と呼ぶのも三四里の濱を九十九里濱と呼ぶやうに針小棒大な法螺が昔ながらに残つてゐる。

七里ヶ濱のゲソゲソ病院には肺病患者が押しかけてゐる。そのそばには白人の賭博ホテルが人目を思ふでモダンガールを收容し白人の樂遊境モナコ王國を築いてゐる。

電車の中には腰越から乗つた一人の女が子供を背負つたまま釣革にブラ下つてゐる。かよわい女性を保護するために男が席を譲つてやることは、一ツの軽い美舉である。ところがその女の前に傲然と腰かけてゐる若い横柄な男は代つてやらうともしない。その時立往生の他の男はたまりかねたか。

「この方に席を與へてやつたらどうだ。」

腰掛た男は一向、聽えぬ振りである。立往生の男は一段と聲を荒だてて叱りつけるやうに言ひ放つた。それでも聞えぬ振りで、ボカーンと窓外を見てゐた。

「君に云つてゐるんだよ」

と押しつけて云はれて、はじめて打り向き、ケロリとした顔で、

「ワシは切符をもつてゐるよ」と、

これに似たことをアメリカでも度々見て來た。アメリカではすぐに女に席を譲るのが男の名譽となつてゐる。しかし支那人にはそんな名譽はひゞかない。アメリカ人が支那人に向つてその席を女に與へてやれと督促すると、

「ワシは五仙を拂つてゐる。」

と、フテ腐つて動かぬのが支那人だ。それによくも似寄つたことを湘南の電車の中で見たのだ。五錢の權利——わからず屋は横着と權利を穿きちがへてゐる。

片瀬の濱にも數千の人出だ。由井ヶ濱の海水浴場にも二三萬人は出てゐる。しかし外國の海水

浴場に比べると、大きい顔もできない。

十二三丁もつゞく砂濱は地下三尺を掘れば人骨が出るといふまでに由井の濱邊は首斬りの名所である。しかしそれは鎌倉の時代のことだ。

サラリーマンの横つ腹

日本の女中は一々主婦に伺つてから仕事をする。主婦の指圖がなければ全くの手持不沙汰だ。だから主人が留守だと、何一ツかたづかない。外國の女中は常識的にさつさと片づけて、自分の時間が來ると自由に遊ぶのだ。日本の女中はいつまでもだらしなく働かねばならない。朝起きてから寝るまで、ぐづりぐづり動いてゐる。それも主婦の命令によつて——だ。

私は女中の例をあけたが、小僧でも、小使でも、役人でも教師でも、會社員でも、上級の人から仕事を與へて貰はないと、煙草と雑談に耽つて一向に動かない。

平常ブランクしてゐる仕事貯まると一度に夜の十時十一時まで居残り働く。これは、全

くだらしのない勤務であつて、仕事の上には全くアブノーマルである。だから能率などを考へるよりも、時間のたつことだけを考へる。そして月給日とボーナスデーさへ来ればよいのだ。仕事そのものは上級者の命令發動によつて働くものだと言ふ日本の習慣では、いつまでたつてもものびられない。役所や事務所などでも傲然と構へてゐれば、そこに權威があるものだと思ひしつゝてゐるものが多いやうだ。

都鄙いづれを見ても苦しい金を捨て、無駄な建築を競つてゐる。内容はどうでも立派にしたいと願ふのが、日本人式虚榮病の表情である。

國民大衆の住宅もふところも共に貧弱であるのに、役所だけはさも金持ちらしく立派を張つてゐる。國民はどうでもよい役所さへ立派であれば外國に對しても顔が利ける。また、そこに一等國の價があるのだと意識してゐるなど、本末顛倒の日本人虚榮病は、どこまでも無駄の多いものである。役人から女中に至るまで、給料で生きるものは、たゞ上からの命令で動く、——そして役人達のためにはその代表的な建築が虚榮の巢であるとは、眞になさけない人間共である。

エゴイズムの市場

日本道路のデコボコ。

不愉快な風の日の道路。

道路を我ものと思はない。

煙草のすひ殻を捨てる。新聞紙を散らす。林檎の食ひカスを捨てる。

道路も公園も人のものだ。樹をヘシ折つても、花も摘んでも、大勢が出入するから、誰が盗んだか、誰が荒したか、そんなことは分りつこがない——と、公德を顧みないで、自分さへよけいなよいと云ふのが現代人のモットーであらう。

民衆——お互の公園だ。

道路は國民の道路だ。

そんなことを氣にしてゐた時には、とても生きてはゐられないと言ふのがエゴイズムの表象で

ある。

大勢が楽しむ公園の花を、むごたらしくヘシ折り、それを自分の家を持ち帰って自分だけで樂まうとする獨占的快樂は日本性獨有のものである。電燈を灯す家を見ても、メートルの家では、スキツチに氣を配つて常に電燈節約を忘れない。だが、メートルでない場合は、夜中灯けつ放しで平氣だ。自分のふところさへ痛まないことなら、平氣で不經濟をやる。國家經濟、大衆經濟などの公益觀念については全くゼロだと云ひたい。

役所のものであれば、會社の品であれば、官費だ社費だと、アウトオーダーで不經濟をやる。そしてすこしも顧みないのが日本性の一ツである。

一本のマツチ、一ぶくの煙草でさへも、西洋人の持つ經濟觀念と、日本人のそれとはよほどに差がある。

世界に漂ふキモノ

「日本キモノも馬鹿にしやはるな、ヨーロッパは大はやりだッせー」と、日本キモノの國際進出をよろこぶ。勿論よろこんでいいことだ。しかしそれはヨーロッパ人が日本文化にかぶれて來たのだと日本性の早合點で、さう思ひ込むのは大きな間違ひである。

それではなぜ、日本化するのですか？と東洋式にうぬ惚れ根性を出さずに、よく私の言ふことを聞きなさい。人間そのものの本來から云へば、一ツ所に停滯のできないのが人間である。なに事にも倦きが來る。新しい刺激を求めたい。流行を追うて見たい——それが人間心理の止むを得ないものである。

ヨーロッパ人も自身がヨーロッパ風味に飽いてゐる。だから支那風をとり入れた。日本味をうけ入れて見たいと、日本キモノを眞似て、氣分を一轉化させようとするのだ。決してヨーロッパ人が日本趣味研究に徹底した結果でもなんでもないのだ。

日本商人根性

私はロンドンにゐる時、ある小劇場へ出掛けた。日本商人といふ一幕物の芝居を中幕にはさんでゐるのを観た。

日本商人といふのが、いろんな手段で外国商人を欺むく——その巧妙さを描寫した幕だ。舞臺背景は横濱の埠頭を描してゐた。観客の視線は、あまりにも私に集まる。

その芝居で見せて貰ふまでもなく、日本には石の羅詰で富豪になつた人もある。過ぎ去つた大戦の時もヨーロッパに石羅詰を賣込んだがその商人は昔の人のやうに富豪にはなれず遂に破産して終つた。

鉛筆のシンをゴマ化し、ブラツシユの消毒をゴマ化し、シャツのボタンまでもゴマ化して日本商人の商業道德の低下を廣く世界に廣告してゐることは國利増進ではない。

戦後ヨーロッパの爲替關係が亂れたころ、ヨーロッパ商人から日本に注文した場合に、日本人は爲替關係の打算で、わざと商品引渡の期日を延ばせたり、いろくなカンニングをやるので、日本悪商人の名は全世界的に、廣告されてゐるわけである。それは日本性の缺陷で、利益のために手段を選ばない。利己的取引によるものであつて、日本商人が世界の商人になれない民

族的缺陷である。

外国人が日本内地を、旅行する場合にも、日本人は毛唐の面さへ見ると無茶な代價を食ほる。理髮屋でも、車夫でも、旅館でも平氣で不當な金を要求する。

日本を旅行した外国人はよく云ふ、「日本には外国人と内地人のために二ツの正札がありますのね」と。

日本人といふ代物は金にかけたら全く汚い——宵越の金は使はないといふ江戸ツ子氣質は徳川が民衆に貯蓄をさせぬスローガンの一つだ。徳川は民衆も諸大名も共に弱いものにさしたいと願つた。金を持つと、ほつく恒心が起るから、非貯金を奨励したが、日本人の本性は金の虫であるといひたい。

おメカケの洋行

ヨーロッパ人やアメリカ人の眼には、日本人の金持とさへ云へば、

「おメカケさんが幾人あるでせう。」
と好奇的に心配するのが習ひだ。
それはベルサイユ會議の時、代表西園寺公爵がわざわざ巴里の都に可愛いお花さんをつれ込んだので、

「日本のおメカケ代表。」

と云ふ通信電報は、世界の津々浦々に向つて飛んだ。そしておメカケの世界的遠征だ、おメカケのヨーロッパ征服だと冷罵して新聞紙の三面を賑はせた。當時の女主人たるお花さんも、公爵の膝から捨てられて佻びしい生活をするうちに、美人薄命——櫻花のやうに散つて了つた。

その當時のヨーロッパ婦人のハートは、西園寺公の仕打を敗德的に眺めた。婦人國の結社は陰に陽に西園寺公を破廉恥漢だと攻撃した。そして日本人のモラルを疑ふと叫んだ。西園寺公と日本國民のためにモラル上の悪い宣傳をやつたのであつた。

勿論日本人だからメカケをもつてもよいといふ議論は成りたない。ヨーロッパ婦人が平和會議代表者の中から、アンモラルな人間を排撃しようといふことには、一つの道理が潜んで

るるわけである。

時間喰ひの八百屋町

東京市の亂雑——整理のない都の姿は、決して模範都市とはいへない。すくなくとも模範を垂れようとするなら西洋都市の番地整理を鑑み、先づ東京市が日本の各都市に魁けて整理すべきものだ。

人を訪ねるに××町××番地××某は何處ですと訊いても、容易のことではない。今朝から尋ねてゐますが未だに見つけません——と、半日を無駄にする人はどれだけ多いことであらうか？能率問題の大切な時に一々巡査に訊かねば分らぬなど、巡査の仕事は番地案内のやうに——無駄な時間を捨てるのである。

東京の番地がいくら混雑してゐようとも、やり方では一目瞭然、誰にも訊かずに目的の番地をはずきりと突きとめる方法があるのだ。この番地整理こそ金のかゝらぬ仕事だ。しかしそれさへ